

活動報告書

2020年度

Tokai University Student Project Center Activity Report

2020



2020年度チャレンジセンター

活動報告書の発行にあたって



スチューデントアチーブメントセンター

ゼネラルマネージャー

成川 忠之

日頃より、東海大学のチャレンジプロジェクトにご理解、ご協力いただき、ありがとうございます。2006年に東海大学の建学の精神のもと、学生の社会的実践力を育成するチャレンジセンターが発足し、2021年3月で15年にわたり、学生主体のプロジェクト活動を継続することができました。これまでご支援いただきました皆様に置かれましては、一方ならぬご厚情を賜り、心より御礼申し上げます。

チャレンジプロジェクトは、学生の主体性に基づき、「地域連携」、「社会貢献」、「国際交流」、「ものづくり」、「環境・動植物保護」など多様な分野で活動しています。それぞれのプロジェクトの中では、直面する様々な問題に挑み、その解決を達成(アチーブメント)する経験を重ねることにより社会的実践力を培います。2020年度は34のプロジェクトに合計1,209人が参加しましたが、コロナ禍の影響で、ほとんどのプロジェクトが思うように活動できない中、学生達は知恵を出し合い工夫をこらし、プロジェクト活動を展開してくれました。

「病院ボランティアプロジェクト」では、コロナ禍で実際の活動が困難となったため、オンラインで健康情報を発信しました。「スポーツ社会貢献プロジェクト」では、この時間を活用してスポーツを通じた地域のQOL向上について議論しました。「サイエンスコミュニケーションセンター」はオンラインで実施できる実験を新たに考え、YouTubeで配信しました。「キャンパスストリートプロジェクト」では、伸びしろ座談会を行い、自分たちの活動に対しての思いややりがいを語り合いながら、成長を確認しました。「Tokai Formula Club」では、ZoomやTeamsを使って、CADや車両運動性能の解析などの知識を先輩から後輩に伝授する活動をしました。「ライトパワープロジェクト」や「Tokai Dream Space Team」でもリモートで連携してパーツを製作するなど、技術を駆使して活動を継続しました。「東海大学学生ロケットプロジェクト」では、この機会を利用して、これまで分散していた情報をオンラインで共有する取り組みをしました。「Tokai International Communication Club」や「Beijo Me Liga」でも、ZoomやSNSを活用して、外国にルーツのある子供たちの学習支援などを継続して関係を維持しました。「3.11生活復興支援プロジェクト」では10年史の書籍を制作しました。「DAN DAN DANCE&SPORTSプロジェクト」では実現にはいたらなかったもののオンラインでの講演を企画しました。「Sunflower」や「Takanawa共育プロジェクト」、「先端技術コミュニティACOT」、「阿蘇は箱舟プロジェクト」でもZoomやTeamsを駆使して議論を深めたり、SNSで情報発信しました。「阿蘇援農コミュニティプロジェクト」では、さまざまな活動を企画しながらも、農家さんとの信頼関係などを考慮し、強い意志を持って実際の活動を行わない選択をしました。「あにまるれすきゅープロジェクト」ではSNSを通じて犬の里親を募集しました。普段は地域住民を対象としている「札幌ボランティアプロジェクト」も、本年度はコロナ禍の影響で困っている1年生に対して交流会を開くなどの活動をしました。そのほかにも、15のユニークプロジェクトがそれぞれアイディアを出し合い活動しました。以上のように、本年度の活動は、これまでにもまして、学生たちの努力の結晶の記録となっています。

さて、東海大学では、2021年に大規模な改組が行なわれました。その中では、学生生活全般を支援するためにスチューデントアチーブメントセンター(SAC)が設立され、チャレンジプロジェクトもSACが担当することとなりました。新型コロナウイルスによる感染拡大は、まだ予断を許さない状況が続きますが、SACではプロジェクト活動を通じて学生の社会的実践力を育んで参ります。引き続き、ご協力、ご支援賜りますよう、お願ひ申し上げます。

2021年10月

INDEX

2020年度チャレンジセンター	1
活動報告書の発行にあたって	
チャレンジセンターの取り組み	3
チャレンジプロジェクト活動報告	4
【湘南キャンパス】	
病院ボランティアプロジェクト	4
スポーツ社会貢献プロジェクト	5
サイエンスコミュニケーター	6
キャンバスストリートプロジェクト	7
Tokai Formula Club	8
ライトパワープロジェクト	9
東海大学学生ロケットプロジェクト	10
Tokai International Communication Club	11
3.11生活復興支援プロジェクト	12
DAN DAN DANCE & SPORTS プロジェクト	13
Beijo Me Liga	14
Tokai Dream Space Team	15
Sunflower	16
【高輪キャンパス】	
Takanawa共育プロジェクト	17
【熊本キャンパス】	
先端技術コミュニティACOT	18
阿蘇援農コミュニティープロジェクト	19
阿蘇は箱舟プロジェクト	20
あにまるれすきゅープロジェクト	21
【札幌キャンパス】	
札幌ボランティアプロジェクト	22
ユニークプロジェクト活動報告	23
メディア掲載一覧	23
1年間の活動記録／チャレンジセンター長賞受賞者	24
プロジェクト年表	25

チャレンジセンターは
社会が求める4つの力を育む成長の場です。

自ら考える力 集い力 挑み力 成し遂げ力



対象を見据え、その本質を掘り下げ
可能性を広げる力

多様な人々の中で生き、
その集団の形成、維持に寄与する力

困難な問題に主体的に向き合い、
解決・達成に向け踏み出す力

目標達成の途中で生じる失敗や
挫折を乗り越えて、目標に近づく力



社会的実践力を身につけ、
高い専門性で社会に貢献できる人材

チャレンジセンターの取り組み

チャレンジセンターでは、学生たちがより大きな目標を成し遂げられるように、様々な面できめ細かく支援します。委員会やプロジェクト協議会を通じて、組織内での情報交換や連携を図るとともに、プロジェクト活動の質を高めるための人的な支援として、各プロジェクトに原則として本学の教職員から選抜されたプロジェクトコーディネーターおよびプロジェクトアドバイザーを配置するなど、安心して活動に取り組むことができるサポート体制を整えています。

チャレンジセンター運営委員会

チャレンジセンター運営に関連した部長などで構成され、実行委員会での協議を踏まえ、本センターの運営全体について最終的な審議をします。

チャレンジセンター実行委員会

チャレンジセンターの活動に関連した課長などで構成され、プロジェクトが活動するにあたり必要な環境整備等、実務的な内容を審議します。

プロジェクト協議会

プロジェクト活動を円滑に推進するため、プロジェクト間の情報交換、本センターからの連絡事項の伝達を行う場として、プロジェクト代表者の出席を義務付け、原則として月1回開催します。今年度は全6回開催し、全キャンパスをMicrosoft Teamsで接続して実施しました。

チャレンジセンター組織

現代教養センター
所長 成川忠之教授

チャレンジセンター
センター長 岡田工教授

プロジェクトコーディネーター

プロジェクト全体の進行状況を把握し、活動全般の相談役や提出書類の作成指導を担います。また、予算管理・工程管理に関する指導や、活動が困難な状況の時に円滑に進むよう学生にモチベーションを与える「縁の下の力持ち」としての役割を担っております。なお、コーディネーターは本センターが実施する複数の研修会の受講が義務づけられており、これは東海大学人事制度において「業務別研修」と位置づけられたオリジナルのSD(Staff Development)活動です。

プロジェクトアドバイザー

専門的知識または技能を持った教員が担当し、各プロジェクトに1名以上配置されます。主な役割として、プロジェクト活動に対して専門的な立場から指導・助言を行います。プロジェクトの活動をより質が高く大きなチャレンジとするためには、プロジェクトアドバイザーの豊富な知識と経験に裏付けられたアドバイスが必要になります。

支援

支援

支援

プロジェクト活動

学部・学科・学年の枠を越えた学生たちがチームならではの目標を掲げ、自主的および創造的に地域活性、国際交流、ものづくりなどの企画を行うことで社会的実践力を体得していきます。

チャレンジプロジェクト

- ◆学生が自由な発想で企画・立案した年間を通じたプロジェクト活動
- ◆プロジェクトコーディネーター、プロジェクトアドバイザーを配置
- ◆メンバーが複数学科に横断して構成されていること
- ◆参加人数が原則30名以上であること（湘南キャンパス以外は原則20名以上）

【プロジェクト修了認定】

チャレンジプロジェクトがチームとしての条件を満たし、かつプロジェクトコーディネーターによって1年間の活躍が評価されたプロジェクトメンバーには修了認定証が授与されます。

ユニークプロジェクト

- ◆将来的にチャレンジプロジェクトとして発展することを目的とした萌芽的位置づけのプロジェクト
- ◆少人数のグループ（原則10名以上）で構成
- ◆学生からの希望があり、かつ人員が配置できる場合はプロジェクトコーディネーターとプロジェクトアドバイザーを配置

チャレンジプロジェクト活動報告

病院ボランティアプロジェクト

湘 南

達成目標

患者さん一人一人の状況に応じたコミュニケーションを取り、健康の大切さを伝え、プロジェクトに関わった一人一人が自分なりに健康について行動する為の第1歩としてのプロジェクト活動及び各企画のクオリティ(満足度)の向上

学びのテーマ

相手を思いやる力を身につける

リーダー	高橋悠河	工学部電気電子工学科	3年
サブリーダー	星田航翼	政治経済学部政治学科	2年
	尾崎 将	工学部医用生体工学科	3年
広報リーダー	小沢新夏	法学部法律学科	3年
会計	森岡 成	文化社会学部心理・社会学科	2年
アドバイザー	池村明生	教養学部芸術学科	
コーディネーター	佐藤多嘉雄	医学部付属病院健診センター	

(参加人数 31名)

活動概要

病院で入院生活を送る患者さんの中には、今までの生活から分断された生活に戸惑いを覚え、不安やストレスを感じている人もいる。病院ボランティアプロジェクトはそんな不安を抱えた患者さんの心を少しでも緩和するために活動をしている。本プロジェクトの主な活動は病棟でのボランティア活動である。また、病院内でコンサート等のイベントを企画し、医療セミナーや絵本読み聞かせ会といった地域の方々を対象とした活動も行っている。



▶作成した絵本を動画化した「おくすりってどんな物?」

プロジェクトとしてコロナ禍にどのように向き合って活動したか

コロナ禍での活動となった今年度はオンラインでの健康情報発信に力を注いだ。

従来行ってきたが中止になった企画は多く、特に病院に向けて行う企画ができなくなった。これは病ボラにとって大きな壁となった。2020年度の達成目標である「患者さん一人一人の状況に応じたコミュニケーションを取り、健康の大切さを伝え、プロジェクトに関わった一人一人が自分なりに健康について行動する為の第1歩としてのプロジェクト活動及び各企画のクオリティ(満足度)の向上」の半分が達成できないからである。

そこで病ボラとしてはコロナ禍との向き合い方として、オンラインでできる活動である「健康情報の発信」ができる限り頻度高く行いながら、医療従事者や患者さん向けた活動を模索した。具体的に行なった活動については、①Twitterでの健康情報を平日毎日発信する「病ボラだより」②過去に制作した絵本を動画化し、YouTubeに公開する「絵本動画化企画」③例年行っている「絵本制作」の3点を実施した。①の「病ボラだより」では、病ボラメンバーが各自取り上げたいテーマを持ち寄って投稿した。その際にポジティブな印象かつ今後の生活に取り組める様な内容にする事で、不安を煽らず楽しく健康について意識をしてもらえるよう心がけた。②の「絵本動画化企画」では、動画を見てもらいたい子どもだけでなく、大人の方にも見てももらえるように聞き取りやすく落ち着いた声で制作した。本企画はコロナ問題が落ち着いた後でも、多くの方に健康知識をとどける為に実施して行きたいと考えている。そして最後に③の「絵本制作」である。今年度はアレルギーを主テーマとして制作した。内容にこだわり、アレルギーの仕組みだけではなく、アレルギーが原因で起きる偏見を防止することも考えて脚本を考えた。

このように病ボラは大きく3個の企画を実施した。病院向けに健康クイズを届ける企画等の実施も検討したが、病院側とのお話しで安全に病院運営をするために延期となってしまった。コロナ禍でどうしても入院患者の方々の不安緩和をする事が難しくなっているが、できる限りの事を今後も企画・検討していくつもりである。

また、今年度オンラインでの活動を通じていろいろな活動方法を模索した結果、オンラインでの活動の効率的で良い点を学んだとともに、オンラインでは難しい、対面でのコミュニケーションが与える影響の大きさについて知ることができた。

スポーツ社会貢献プロジェクト

湘 南

達成目標

スポーツが地域のQOLの向上にどう影響するのかを学び調査し、来年度に地域のQOLの向上を目的としたイベントを作るために基盤を作る

学びのテーマ

スポーツが地域のQOLの向上にどう影響するのかを学ぶ

リーダー サブリーダー	中田伶哉 三浦弥夢	法学部法律学科 体育学部スポーツ・レジャーマネジメント学科	3年 3年
広報リーダー 会計	神田優輝 中村仁美 東端日菜	体育学部スポーツ・レジャーマネジメント学科 体育学部スポーツ・レジャーマネジメント学科	3年 3年
アドバイザー	萩裕美子	体育学部スポーツ・レジャーマネジメント学科	3年
コーディネーター	大塚耕祐	チャレンジセンター	

(参加人数 52名)

活動概要

私たちの活動理念は、「スポーツを通じて、地域のQOLを向上させる」である。この理念を実現していくために、スポーツがQOLの向上にどう影響するかを考え学び、地域のQOLの現状を調査し、地域の方々にQOLの向上を目的としたイベントを開催する。イベントを開催することによって、地域に人々の交流や笑顔を作り出し、地域のQOLを向上させることができる。地域のQOLを向上させることによって、地域の人々の生きがいや健康を生み出すことが、私たちの地域社会への貢献活動である。



▶ ス波社だより

プロジェクトとしてコロナ禍にどのように向き合って活動したか

今年度は、プロジェクトとしての基盤を作ることと、コロナ禍で私たちが地域に貢献できることについて主に活動をした。プロジェクトの基盤を作ることについては、以前までの活動の中でスポーツを通じて地域に貢献することを軸に活動を行っていたが、スポーツを通じて地域に貢献することは具体的にどのように地域に貢献していくのかということを、疑問に感じていたメンバーがメンバーへのアンケートで多くあり、メンバーでスポーツが地域にどのように貢献できるかを考え、考えたことを活動理念としてプロジェクトの基盤を作ることにした。まずは、プロジェクトの基盤である活動理念作成に取り組んだ。メンバー間ででた考え方として、スポーツは地域に人々の交流・笑顔・健康を生み出すという考えにまとまり、このようなことはQOLの向上に貢献できることではないかとなり、活動理念を「スポーツを通じて、地域のQOLを向上させる」に決めた。次に、スポーツが地域のQOLの向上にどう影響するのかを学ぶために、ワークをオンラインで行った。ワークでは、毎回話し合うテーマを決めて、QOLや私たちが地域にできること等について話し合った。また、ワークではQOL調査票の作成についても話し合いを行い作成した。QOL調査票は、来年度利用する。コロナ禍で私たちが地域に貢献できることについては、イベント等がコロナ禍で行うのが難しい中で、非接触で私たちができることについてをワークで考え、体を動かすことやスポーツの楽しさを地域に広め、地域のQOLを向上させるための広報誌を作成をすることにした。地域の多くの年代の方々に見てもらえるように、親子用、大学生用、高齢者用の3つを毎月作成した。工夫した点は、親子用では子どもでも見やすいようにひらがなを多くしたり、高齢者用では字の大きさを大きくしたりした。また、多くのメンバーが作成に関わるようにできるだけ毎回作成するメンバーを変えたり、作成してでた反省点を共有して次回はより良い広報誌になるように工夫をした。掲示先も平塚市の3施設に協力していただき、高齢者用と親子用を毎月掲示させていただいた。これは、高齢者の方と親子の方が多く平塚市の施設を利用するため、高齢者用と親子用を掲示させてもらった。大学生用は、ス波社のSNSをフォローしている大学生が多いことから、SNSに掲示をした。広報誌に載せる情報も信用性の高い、公的機関の情報を多く利用した。今年度は、コロナ禍でイベントを開催することが難しい中で、もう一度活動について見直したり、コロナ禍でも地域に貢献できることを考えて活動を行った。このような活動を通じて、イベントは開催ができなかったが、毎年の活動が同じでマンネリ化していた中で、新しいス波社の基盤を作り、新しい第一歩を踏み出すことができたのではないかと思う。また、イベントができなくメンバーのモチベーションを保つのが難しい中で、ワークでメンバー全員で今後のス波社について考えたり、ス波社だよりの作成メンバーをできるだけ毎回変えて多くのメンバーが関わりやすいようにするなど、工夫してメンバーのモチベーションも保つことができたのではないかと思う。来年度は、オンラインでもできるだけ毎年開催しているイベントを開催し、今年度ワーク等で考えた地域のQOLを向上させることができる新たな取り組みも行っていく。

サイエンスコミュニケーター

湘 南

達成目標

理科離れを防ぎ、科学の楽しさを通して人と人とのつながりをつくる

学びのテーマ

情報共有の場を増やすことで計画的な運営を行い、自らが科学の知識を増やし楽しさを伝える

リーダー	大谷内梨聖	工学部生命化学科	2年
サブリーダー	中山悠生	工学部応用化学科	2年
広報リーダー	桂川歩夢	理学部数学科	2年
会計	吉田有佐	理学部化学科	2年
アドバイザー	岡田 工	チャレンジセンター	
	長田和也	現代教養センター	
コーディネーター	齊藤祐子	湘南健康推進室	

(参加人数 40名)

活動概要

当プロジェクトは、湘南キャンパスを活動拠点とし、科学イベントを通して「理科離れ」という社会問題を解決するために活動している。主に小中学生を対象に、科学館や公民館、学校、商業施設などで実験ショーや実験工作といった科学イベントを企画・実施している。加えて、SNSなどを活用することでより多くの人と科学のつながりをついている。同時に、科学イベントを通して多くの参加者の方々とのコミュニケーションを図り、人と人とのつながりをつくることも目指す。



▶ サイエンスリンク・オンライン

プロジェクトとしてコロナ禍にどのように向き合って活動したか

今年度の活動は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から対面での活動が制限され、情報共有の方法や新メンバーの確保、企画の実施に苦戦した。例年当プロジェクトが主催していた「世界一行きたい科学広場in湘南」もオンラインでの企画に切り替えることができず、中止となった。多くの企画が中止となった中、臨機応変な対応が求められ、来年度以降の活動に向けて試行錯誤した1年となった。

当プロジェクトは、つなげる(企画・運営)チーム、つたえる(実験開発・実演)チーム、ひろめる(広報)チームの3つから成り、メンバー全員がいずれかのチームに所属して活動している。今年度はオンライン活動に対応するため、つなげるチームとひろめるチームを合同チームとして活動してきた。つたえるチームは従来のイベントの企画内容を見直し、オンラインでも実施できる新規実験企画の開発を行った。つなげる・ひろめるチームは、各イベントで配布していた定期広報物「scio」の代替として科学記事を作成し、ホームページにアップする他、チラシ作成やホームページの運営についての勉強会を行った。また、全体としては活動継続のために新メンバーの勧誘に努め、説明会を複数回開催した。今年度加入の新メンバーに対し、各チームで活動内容の伝達を行ったものの、大学内で管理している実験器具は使用に限りがあることから、実験ショーや実験工作的引継ぎは順調に進まなかった。オンライン状況下で情報共有が難しく、各チームの連携が取りにくい中、より計画的な活動をしていく必要がある。

今年度実施したイベントとして、8月に参加したサイエンスリンク・オンラインというYouTubeを用いた動画配信型の企画がある。他のサイエンスコミュニケーション団体も参加した企画ではあったが再生回数は少なく、リアルタイム配信で得られたコメントに子どもたちのものはなかったことから、広報活動の強化が課題である。

今年度の活動を踏まえ、従来の対面での科学イベントの実施に限らず、多様なツールを利用したオンラインイベントの開催や情報の発信によって、活動拠点である湘南キャンパスから遠く離れた地域の子どもたちと科学をつなげることができることを実感した。オンラインの企画はどこからでもアクセスできるため、より多くの子どもたちが科学と触れ合う機会を提供でき、理科への興味、関心を深めることにつながる。「理科離れ」という社会問題の解決に少しでも貢献できるよう、今後は会場での参加型企画に限らず多様なアプローチの方法も取り入れ、活動を続けていきたい。

キャンパスストリートプロジェクト

湘 南

達成目標

地域の活動に積極的に参画し、学内外でのC.A.P.の存在感を高め、学生と地域の架け橋となる

学びのテーマ

地域の課題と向き合う中で、挑戦する力、企画する力、発信する力を培う

リーダー	川東綾香	教養学部人間環境学科	3年
サブリーダー	辻 陸斗	教養学部人間環境学科	3年
	坂西竜之介	工学部電気電子工学科	2年
広報リーダー	宮崎正弘	工学部電気電子工学科	2年
会計	小野里りな	政治経済学部経済学科	2年
アドバイザー	池谷美衣子	現代教養センター	3年
コーディネーター	佐野麻理子	チャレンジセンター	3年

(参加人数 27名)

活動概要

本プロジェクトは、地域交流・地域活性化を目的にイベントを通して地域住民と学生の架け橋となることを目指している。具体的には、大学近隣に暮らす子どもから高齢者まで多様な世代の住民が学生とともに楽しめるワークショップ・イベントを学生主体で企画・運営を行う。他にも、地域の施設で学習支援や東海大学前駅の花壇を商店会の方と植栽を行っている。このように、地域住民と学生が積極的に交流できる場を通年で提供することで地域住民と学生の双方から末永く愛される場所の実現を目指している。



► クリスマス U-nightの準備の様子

プロジェクトとしてコロナ禍にどのように向き合って活動したか

私たちキャンパスストリートプロジェクトは、「地域貢献」「地域活性」で地域の魅力を学生に魅力を伝え、地域と学生の架け橋になることを目指して活動しているプロジェクトである。「この街一緒に盛り上げない？」を合言葉に地域の交流に参加し、学生と地域住民の楽しめるイベントの主催や地域の魅力を発見し学生に向けて発信を行っている。今年度は、新型コロナウイルスによって例年通り直接会ってのイベント開催ができなくなってしまったため、「C.A.P.伸びしろ座談会」(全2回)、「C.A.P.的広報講習会」、「クリスマスU-night2020」の3つを開催した。「第1回C.A.P.伸びしろ座談会」ではキャンパスストリートプロジェクトに対する再認識として、メンバー各々がキャンパスストリートプロジェクトに入った動機を語り、キャンパスストリートプロジェクトへの現在のイメージを共有した。さらに、活動に対しての思いや、やりがいをメンバー間で話し合うことでプロジェクトの活動の意義や方向性を確立させた。「第2回C.A.P.伸びしろ座談会」では春学期におけるプロジェクト活動の現状を伝えながら、プロジェクトのOB・OGから近況報告や社会人の立場からプロジェクトの振り返りなどを聞き、意見交換を行った。本座談会は、今後のキャンパスストリートプロジェクトとしての活動のあり方を考える機会となった。「C.A.P.的広報講習会」では、毎年行っている広報講習会をオンラインでコロナ禍での活動でSNSやインターネットを多く活用するようになったことから、情報リテラシーに焦点をあて、情報発信の利点と危険な点を理解することを目的とした企画である。広報講習会は毎年行っているが、今年度はオンライン開催とし、チャレンジセンターの広報係の協力のもとで他のプロジェクトの方にも参加していただいた。「クリスマスU-night2020」では毎年行っているクリスマスツリーの設営はコロナ禍のため断念せざるを得なかったが、東海大学駅前の駅前広場・陸橋をイルミネーションで装飾をし、活気のある空間を演出した。また、秦野市立大根幼稚園の方々に協力していただきクリスマスオーナメントを作成し陸橋に展示した。オーナメントの作り方動画を作成し材料と完成品の受け渡しは郵送で送るなど、対面しない方法で企画を行った。他にも、オンライン企画として写真アートの作成を行った。SNSを用いて写真を集め、その写真を利用してクリスマス写真アートを作成しSNSで公開した。

今年度は、プロジェクトとしてコロナ禍で地域の方々との対面での交流ができなかったことからキャンパスストリートプロジェクトとしての地域交流の重要性を改めて認識する機会となった。また新しい方法で、どのように地域の方々と交流ができるのかや地域活性につなげることができるのか、を模索しながら活動を行っていた。今後はオンラインでの新企画の開催や今年度は中止になってしまったイベントを規模を縮小開催する、一部の企画でオンラインを利用するなど工夫をしながら今後もプロジェクトと向き合っていきたいと考えている。

Tokai Formula Club

湘 南

達成目標

2021年度学生フォーミュラ大会出場へ向け活動を行う

学びのテーマ

学生フォーミュラ活動で学ぶものつくりプロセスを通じて、社会的実践力を身に着けていく

リーダー	前田剛志	工学部機械工学科	2年
サブリーダー	田之上洋輝	工学部動力機械工学科	2年
	八木光輝	工学部動力機械工学科	3年
広報リーダー	生川晃聖	工学部動力機械工学科	2年
会計	大平貴士	工学部動力機械工学科	2年
アドバイザー	加藤英晃	工学部動力機械工学科	
	成田正敏	工学部動力機械工学科	
	吉永昌史	工学部動力機械工学科	
	高橋 後	工学部動力機械工学科	
	森下達哉	工学部動力機械工学科	
	森山裕幸	工学部動力機械工学科	
	関根啓由	技術支援課	

(参加人数 24名)

活動概要

Tokai Formula Clubは2002年に学生フォーミュラ大会への参加を目的として設立され、2004年度日本大会に参戦して以来、毎年日本大会に参戦してきた。昨年度は大会が中止となつたが、2019年度には総合7位を獲得することが出来ており、これは歴代2位に相当する結果である。さらには2018年度に引き続きトップ10入りを達成することが出来た。また、2018年度大会のデザイン審査においてTFCの過去最高得点となる123/150点を獲得した。



► TFC独自のChallenge Week告知画像

プロジェクトとしてコロナ禍にどのように向き合って活動したか

私達Tokai Formula Clubが今年度、コロナ禍の状況の中活動を行つていったことでぶつかってしまった問題が大きく分けて3つある。まず初めの問題として、新入生の勧誘方法が無くなってしまった、という事だ。感染症が流行し始めたのはちょうど年度末ごろだったので、春学期から大学はオンライン授業となり、今まで対面で勧誘をするためにしていた準備が、全てできなくなってしまった事があった。次に出てきた問題としては、コロナ禍前までは、対面で会議を行つていたために、今まで通りに会議を行うことができなくなってしまったという事である。そして最後の問題は、大学にあまり行つたことがなく、活動に対するイメージがあまりできていない1年生に対して講座などを行つていかなくてはいけなくなってしまった事がある。以上の3点が今年度、コロナ禍の状況の中活動を行つていったことでぶつかってしまった問題だ。ではそれらの問題を、どのように私達のチームは乗り越えていったかを説明すると、まず初めの問題である、新入生の勧誘方法については、対面での勧誘が行うことができなくなってしまったため、TwitterやInstagramなどのSNSを用いて積極的に活動情報の発信などを行なった事や、zoomなどを使つたオンライン説明会を実施し、勧誘活動を行つた。そして、それらのことを行つたことによつて、15人程の1年生に加入してもらつ事ができた。次の問題である、対面で行つていた会議については、LINEでのグループ通話や、Microsoft Teamsなどを用いたオンライン会議を週1回程行つてついた。そして最後の問題である、オンラインでの1年生講習を行つていかなければいけなくなってしまった問題については、Microsoft Teamsなどを用いて画面共有をしながらTFCの班の活動の紹介や、CAD講座を行つていき、乗り越えていた。今年度は学生フォーミュラ日本大会が中止になつてしまつた事もあり、私達のチームは、2021年度大会を目指した活動となつたが、来年度大会を目指していく上で今年度新しくチーム内にVehicle Dynamics班が設立され、この班では主に車両運動性能の解析を行い、チームの車両の設計やセットアップ、ドライバートレーニングに役立てていくことを目的として活動を行い、来年度大会に向けた準備も行つてついた。今年度のTokai Formula Clubの活動は、対面での活動が行えず、全面的にオンラインでの活動となつたが、チームメンバーとともに今年度行つた様々な活動を通じて「学生フォーミュラ活動で学ぶ、ものつくりプロセスを通じて、社会的実践力を身に着けていける活動」となつていくことができたと思う。

ライトパワープロジェクト

湘 南

達成目標

ソーラーカー・電気自動車・人力飛行機を設計・製作することでものつくりを学び、ソーラーカーの国際大会や鳥人間コンテストに出場し、優勝を目指す。また、大学近隣の地域社会にものつくりの楽しさや省エネルギーの魅力を伝える活動を企画し、実施する。この活動の他に、学内外で車体・機体の展示活動を積極的に行うことで社会に貢献する活動を開拓する。

学びのテーマ

メンバー1人1人が相手を認め、協力する大切さを学ぶ

リーダー	遠藤龍作	工学部電気電子工学科	3年
サブリーダー	澤田光一郎	工学部動力機械工学科	2年
	船木竜太郎	工学部動力機械工学科	2年
広報リーダー	赤根祐作	工学部機械工学科	3年
会計	加々美昌樹	工学部機械工学科	3年
アドバイザー	木村英樹	工学部電気電子工学科	
	佐川耕平	工学部電気電子工学科	
	福田紘大	工学部航空宇宙学科	
	池田知行	工学部航空宇宙学科	
コーディネーター	小澤伸将	チャレンジセンター	
	村井健太郎	チャレンジセンター	
	平島滋義	チャレンジセンター	

(参加人数 77名)

活動概要

ソーラーカー・電気自動車・人力飛行機を設計・製作することでものつくりや協力の大切さを学び、ソーラーカー、電気自動車の国際大会や鳥人間コンテストに出場し、優勝を目指す。また、大学近隣の小学校や中学校などの地域社会にものつくりの楽しさやクリーンエネルギーの魅力を伝える活動を企画し、実施する。この活動の他に、学内外で車体・機体の展示活動を積極的に行うことで社会に貢献する活動を開拓する。

私たちのクリーンエネルギーは...



▶ 最終報告会の様子

プロジェクトとしてコロナ禍にどのように向き合って活動したか

人力飛行機チームでは、teamsやslackのオンラインチャットツールや通話ツールを活用して活動を行った。

主な活動は、「機体の見直し」「新パーツの検討」「オンラインイベントの開催」を議題とした会議である。対面での会議と違い話し合いのしづらさが生じることを懸念し、例年よりも会議の機会を多く設けることで意見交流の活性化を図った。会議では、製作活動の自粛により機体主要部のパーツ製作を中断した為に機体について見つけなおす時間を確保することが出来たことから例年であれば大きく進めることのできなかった新たなパーツについての検討を進めた。また、ものつくり教室を対面で開催することが難しかった為オンライン企画を検討し会議を行った。

主要部のパーツ製作中断の傍ら電装部品においてはオンラインツールを活用しメンバー間で連携を取ることでリモート製作を継続させた。これにより今までの技術をベースに改良し、より合理的で安全性に長けた部品の開発を達成させた。

この他にも、情報発信活動として今年度から新たにInstagramを用いて広報を行った。本来であれば機体製作活動の進捗などを外部発信するためのツールとして使用することを目的としていたが製作が思うように進まないことから機体紹介などの企画投稿を行うことで活用した。人力飛行機の魅力やチームについて多くの方に知っていただくことをモットーに、飛行機の部品の解説や過去機体の紹介など幅広く投稿を行った。投稿において徐々に閲覧者の数が増加していることから今後の広報活動への良い影響が期待できる。

ソーラーカーチームではteamsを利用しオンライン中心の活動を行った。

また秋田県への遠征や、ものつくり館での車体整備などを行った。主な活動は「新型車体の開発」「秋田遠征」「勉強会」である。今年度はオンラインで車体の開発を行った。車体の開発会議をオンラインですることは初めてであり、従来の活動形態では遅れをとることが予想された為、定期的に行う連絡会議に開発状況を報告する場を設け、メンバー間で情報が共有できるように工夫した。また開発においてもオンラインになってしまって学生同士が意見交流を行ったり、スポンサー企業と学生がメールなどでやりとりするようになった為、より学生主体の車体開発が行えた。

昨年10月にはソーラーカーの情報収集を行う為秋田県に遠征をした。これは2021年度に予定されていたブリヂストン ワールド ソーラー チャレンジへ参戦をする為だった。来年度大会は中止されたが、人材育成の意味も込め、引き続き設計は続けていく。また、今年度はメンバー育成の手段を大幅に変更。従来の先輩が後輩と一緒に作業をして技術を伝達させる方法から、勉強会を設けて一度に技術を教える方法に変更した。これはコロナウイルスによる影響で直接技術を教える事が困難になったからである。今年に入り、ものつくり館に入れるようになった為、車体整備と新型車体作成の準備をものつくり館に入って行った。

東海大学学生ロケットプロジェクト

湘 南

達成目標

技術を軸とした学年の隔たりと外部の隔たりを超えた交流をする

学びのテーマ

技術を軸とした学年の隔たりと外部の隔たりを超えた交流をする

リーダー	堀井滉大	工学部航空宇宙学科	4年
サブリーダー	井上直樹	工学部機械工学科	4年
広報リーダー	菅原一真	工学部材料科学科	4年
会計	田村和樹	工学部航空宇宙学科	2年
アドバイザー	加藤亮太 那賀川一郎	工学部航空宇宙学科	2年
	池田知行	工学部航空宇宙学科	
	森田貴和	工学部航空宇宙学科	
コーディネーター	宮西宏明	技術支援課	

(参加人数 24名)

活動概要

学生の手による初の宇宙到達を目指し、ハイブリッドロケットの研究・開発に取り組んでおり、中期目標として定めたロケット到達高度10kmに近づくためには非効率的な開発では到底達成できないと考えた。そこでコミュニケーションを団体内で高め、人的資金的に効率的なものとすることを考えたが、コロナ禍で活動が制限されたため、教育活動や設計活動にシフトし、10kmを目指すロケット開発を行う来年度への足掛かりをつくった。



▶ 最終報告会の様子

プロジェクトとしてコロナ禍にどのように向き合って活動したか

当団体ではロケットを設計製作し打上げを行い解析までを行う一貫性を持った活動がこれまで主であり、コロナ禍での活動自粛は今までの当団体での活動を根本的に搖るがるものであった。

当団体では以前より活動場所の分散化を進めていた。というのも、1年前まで設計情報や会議議事録その他の情報までもがメールやUSBドライブなどの非オンライン環境でやり取りされていた。この状態だと以前の設計がどんなものだったかやどのような経緯で設計がなされたかなどの情報のトレーサビリティが非常に難しいものとなっていた。この状況は後輩の教育活動などにおいて、すべて後輩に対し能動的に情報開示を行う必要があり、上級生側の負担になっていた。また、日常の活動としてもオフライン環境がメインであったため対面での活動がメインとなっていた。この問題を開拓するため、情報のオンライン化を進めることで活動場所の多角化や情報が団体内に常にオープンになることで発生するコミュニケーションの活性化、下級生による自発的な情報の閲覧などが多く行われ団体としての活動性が飛躍的に向上した。今回のコロナ禍ではこのような環境が整ってからすぐの出来事ではあったが、団体全員がすぐにオンライン限定活動へと移行することができ、5月には新入生を交えながら以前と変わらずに教育活動を行うことができていた。オンライン環境がいくら整っても対面での活動を必要とするロケットの製造、打上実験は行うことができなかったが、その分今後目指す高度10kmへのロケットの打上に向け、積極的な設計活動や今後の技術実証用ロケットの設計活動に重点を置き活動を行った。この活動を通して例年では製造に時間を取られ、ないがしろにしがちな基礎の部分の地固めができ、来年度以降の活動の足掛けになると想っている。2年生においては昨年度教育を受けいよいよ実践投入という場ではあったが、設計どまりになり製造へと移ることはできなかった。しかしながら設計に関して熟考の時間が与えられたことでよりよい人材育成が進んだと考えている。また、1年生においては例年よりも人数は少なかったものの、教育活動を行うことができた。入ってすぐのうちに手を動かす面で活動してもらえたかったのは非常に残念であるが設計の前段階の基礎知識の学習を積極的に行ってもらうことができ、来年度以降の活動に活かしていきたいと考えている。

当団体での広報活動は、展示会等への出店などが主であったが今年はコロナ禍によって軒並み中止となった。今まで出店したことのないオンライン展示会への参加も模索したが、ものづくり系サークルの出展ができそうなところは限られておりなかなか見つけることはできなかった。団体で主催するイベントの開催も検討したが構想段階で終了てしまい、開催へこぎつけることはできなかった。来年度では自主的なイベント企画を積極的に行い、活動目的である子供たちの理科離れの防止活動なども積極的に行っていきたいと考えている。

Tokai International Communication Club

湘 南

達成目標

参加者に多文化と関わる魅力を広める発信源となってほしい

学びのテーマ

積極的に多文化共生に触れ、そこで得た経験を発信する姿勢を学ぶ

リーダー	小倉龍矢	教養学部国際学科	2年
サブリーダー	美田知慧	文化社会学部北欧学科	2年
広報リーダー	村岡真菜	文学部英語文化コミュニケーション学科	2年
会計	中本 充	教養学部国際学科	2年
アドバイザー	湯浅茉彩	理学部数学科	2年
コーディネーター	田口香奈恵	国際教育センター留学生支援教育部門	
	雨木秀文	技術支援課	

(参加人数 38名)

活動概要

私たち、Tokai International Communication Club（以下、TICCと称す）は、「学習支援」「異文化理解」「国際交流」の3つの柱を軸として、多文化共生を意識する社会づくりを目指し、国際的な活動を行っている。プロジェクト内には、外国にルーツのある子供たちの学習支援を行う「にこティー教室」、秦野市に住む子供たちとその保護者を対象とした外国に関するイベントを主催する「異文化理解ワークショップ」、「多文化共生」について知識と理解を深めて考える「シンポジウム」、イベントを通して留学生と交流を行う「Foreign Students Communication(FSC)」の4つの企画を設定しており、それぞれ幅広く活動している。



▶ オンラインミーティングの様子

プロジェクトとしてコロナ禍にどのように向き合って活動したか

私たち、Tokai International Communication Club（以下、TICCと称す）は、2020年度の活動において、達成目標を「参加者に多文化と関わる魅力を広める発信源となってほしい。」、学びのテーマを「積極的に多文化共生に触れ、そこで得た経験を発信する姿勢を学ぶ。」と設定した。そして、3つの柱である「学習支援」「異文化理解」「国際交流」を軸とし、「にこティー教室」、「異文化理解ワークショップ」、「シンポジウム」、「Foreign Students Communication（以下、FSCと称す）」の4つの企画と、TICC全体でのイベントを中心に活動を行った。

具体的な今年度の4つの企画とTICC全体の活動内容について説明する。はじめに、「にこティー教室」は、毎週水・木曜日に子供たちへZoomを活用したオンラインによる学習支援を行った。例年は、公民館にTICCメンバーが集まり勉強を教える支援体制を取っていたが、コロナ禍となり、今後どうすべきかメンバーと検討したち、チャレンジセンターの活動が再開された早い段階から、オンライン体制に活動を切り替え、結果、通常どおりの支援活動を行うことができた。月に1回の企画内でのミーティングを行い、支援をしている子供たちの勉強の進捗状況の共有と、活動計画についての話し合いを実施した。今年度の「にこティー教室」で新たに挑戦したことは、Zoomを活用した学習支援とチャレンジプロジェクトの他団体である「Beijo Me Liga」との連携を図りながらの支援活動が挙げられる。また、TICCの学生と連携して、にこティー教室を行っている外部団体「はだの子ども支援プロジェクトゆう」と子供たちの保護者とLINEでつながり、連絡を昨年より円滑なものとしたことも挙げられる。「異文化理解ワークショップ」は、2020年11月にTICCメンバーを対象に異文化理解の向上を目的とした「異文化クイズ大会」を行った。また、当イベント準備のため、2020年10・11月の間に2週間に1回の企画ミーティングを実施した。今年度の「異文化理解ワークショップ」で新たに挑戦したことは、「オンライン上でのイベントの企画・運営」、「学生に向けたイベントとクイズ形式の参加型イベントの開催」が挙げられる。「シンポジウム」の活動内容は、2020年8月にTICCメンバーを対象に「LGBT」への理解を深めることを目的としたイベントを開催した。さらに、2021年1月に東海大学生だけでなく社会人や他大学の方も対象に、「LGBT」への理解を深めることを目的とした「『For the Future』～グローバル化していく日本社会～第12回多様化するセクシャルマイノリティに対して私たちはどうあるべきか～セクシャルマイノリティ～」も開催した。そして、2020年5月より、前述した2つのイベント準備と「LGBT」に関するニュースリリースを目的とした定例ミーティングを週に1回実施した。次に、今年度の「シンポジウム」で新たに挑戦したことは、Zoomを活用した通常どおりの活動と社会人や他大学の方が参加できるイベントづくり等が挙げられる。「FSC」の活動内容は、2020年11月から2021年1月までの間に東海大学の留学生とのオンラインによる交流会を実施した。2020年4月より「東海大学の留学生とのオンライン交流会」の企画・立案を目的とした定例ミーティングを実施した。今年度の「FSC」で新たに挑戦したことは、Teamsを活用した通常どおりの活動、別科日本語研修課程の留学生との初めての交流等が挙げられる。TICC全体は、2020年7月ハワイ大学との交流会を実施した。最後に、今年度のTICC全体の活動の振り返りと次年度のプロジェクト活動について、説明する。まず、TICC全体の活動の振り返りは、今年度私たちが成し遂げたこととして、「活動自粛後に早い段階からオンライン上で活動を再開できたこと」、「オンライン上の活動によって、交流の幅を広げることができたこと」が挙げられる。一方で、反省点・改善することは、「メンバー間でのコミュニケーション不足が目立ったこと」、「TICCメンバー間での活動に対する意識の低下。（書類提出の遅延等）」が挙げられる。以上の反省点をふまえ、次年度2021年度は「今年度行った活動、もしくは今年度より新しくスタートした活動の継続」、「メンバー間での交流の機会を増やし、連携を強化すること」、「SNSをより活用し、活動を発信すること」の以上、3点を意識して活動に臨んでいきたいと考えている。

3.11生活復興支援プロジェクト

湘 南

達成目標

住民と共同し、現在ある企画(夏のこども教室、結の道、小指大縁日、活動10年目に向けて)を地域に定着させる

学びのテーマ

企画を通じて、社会の中で共同するための方法を学ぶ

リーダー	今井 育	理学部情報数理学科	2年
サブリーダー	越光 蓮	工学部建築学科	3年
広報リーダー	國田奈津海	法学部法学科	3年
会計	高橋和樹	工学部動力機械工学科	3年
アドバイザー	浅井亜希	文化社会学部北欧学科	
コーディネーター	小澤 伸智	チャレンジセンター	
	月岡由美子	チャレンジセンター	

(参加人数 30名)

活動概要

東日本大震災から9年がたった現在の被災地は、徐々にコミュニティが形成されつつある。本プロジェクトの活動は、地域のさらなるコミュニティ発展や、震災の風化防止のため東北の当時の状況から現在までの復興の歩みを伝えることや、地域の魅力発信を目的としている。また、本プロジェクトの活動10年目に向けて、活動の記録や地域における復興の歩みをまとめ、発信することを目的とした書籍化プロジェクトを実施している。



▶ オンラインミーティングの様子

プロジェクトとしてコロナ禍にどのように向き合って活動したか

本年度、本プロジェクトでは「住民と共同し、現在ある企画(夏のこども教室、結の道、小指大縁日、活動10年目に向けて)を地域に定着させる。」を活動目標に掲げた。活動10年の節目で最終年度とする方針で動いていたために、住民主体で企画を実施して地域活性に繋がるよう伝えていくことが目標であった。ただ、新型コロナウイルス感染拡大によって、東北へ一度も足を運ぶことができなかつたため、活動の方向を大きく変えることになった。本年度の活動の中心を担ったのが、書籍「被災地と共に、歩み続ける～3.11生活復興支援プロジェクト 活動10年史～」の制作である。本書は“地域に根付いた、学生と住民とが共同で行う復興を示す”、“将来起こりうる災害に対する復興過程のモデルとなる”ことを目的とし、本年度までの活動、歴代のリーダーを集めて実施した座談会、活動を通じて得られる学びなど様々な視点からの内容を掲載している。2019年度から企画の構想を開始し、2020年度より本書の制作が開始している。2020年度は、座談会を含めた全ての制作会議をオンラインで実施している。制作開始の段階では、オンラインミーティングで進めていくことの難しさを感じていたが、たくさんのファイルの一括管理ができるようになったことや、どこにいても会議に参加可能であること、協力してくださる外部の方と直接会わざとも打ち合わせが可能であることなど、オンラインならではの様々な利点を生かして進めることができた。これからは、多くの人に本書を知ってもらうべく広報活動などに取り組んでゆく。

もう一つの企画として、「企画の思い出リレー」を実施している。これは、毎週のミーティングにて、今までの企画をプロジェクトメンバーで振り返り、メンバー自身が企画を通じて感じたことや、当時のエピソード、思い出などを本プロジェクトの所有する3つのSNS(Facebook, Twitter, Instagram)にて発信し、不特定多数の人に知ってもらうことを目的とした企画である。各SNSの特徴を生かして、文章の形式、雰囲気などを変え見た人に伝わりやすいようにすることを意識して投稿を作成した。過去には企画内のインタビューなどで一部のメンバーの声が発信されたことは多々あったが、メンバー全員の声を発信することはなかったためとても貴重な機会となった。

本年度の学びのテーマは「企画を通じて、社会の中で共同するための方法を学ぶ」であった。例年に比べ、行うことのできた企画は少なくなってしまったが、大きな環境の変化にも対応でき、オンラインでの様々なツールを使った審議、案出し、作業の工夫ができた。特に「企画の思い出リレー」は、メンバー全員で案を出し、決定された企画であった。社会的に会議などのオンライン化が進む中、大人数のオンラインミーティングで一つの企画を決め、実行するという良い経験ができた。社会の中で共同するための方法として、現在の社会に適応したオンラインでの様々な活動方法を学ぶことができたと考える。

DAN DAN DANCE&SPORTSプロジェクト

湘 南

達成目標

身体表現のイベントを創り上げることで、身体表現の楽しさを通して「する（踊る）」「みる」「支える」というすべての立場の人のつながりを生み出す

学びのテーマ

どのように表現すればSNSを通して人々に体を動かすことの楽しさや笑顔の大切さが伝わるのかを学ぶ

リーダー	金岡佑眞	工学部原子力工学科	3年
サブリーダー	西谷圭織	工学部建築学科	2年
	久保辰貴	工学部土木工学科	2年
広報リーダー	井坂千夏	体育学部生涯スポーツ学科	2年
会計	清川凌汰	工学部動力機械工学科	2年
アドバイザー	田巻以津香	体育学部生涯スポーツ学科	2年
コーディネーター	中西健人	事務課	

(参加人数 28名)

活動概要

本プロジェクトは1000人以上の人々が関わる公演を創り上げて、身体表現を通したパフォーマンスを「する」「見る」「支える」ことの楽しさを伝えることを活動理念としている。他にもワークショップの企画や外部イベントへの参加などで多くの人が身体表現に触れる機会を作り、より多くの人々に身体表現の素晴らしさを知ってもらうとともに、プロジェクトを通して人と人とのつながる環境を作り地域や社会への貢献を目指している。



▶ オンラインミーティングの様子

プロジェクトとしてコロナ禍にどのように向き合って活動したか

例年では春の交流会やワークショップ、本公演を企画して行っていたが今年度はコロナ禍により対面での開催は出来なかった。

新メンバーの勧誘についてはChallenge Weekで1名、その後私たちで開いた説明会で4名加入した。Challenge Week開催の時点でありSNS上での私たちの活動内容が新入生に伝わっていなかったため説明会を聞きにきてくれた人が少なかったのだと考えている。そこで、1年生が気持ち的に落ち着いた夏ごろにもう一度説明会を行った。活動内容をSNSで多く発信していたこともありたくさんの新入生が説明会を見に来てくれた。説明会ではこのプロジェクトがどんな活動をしているのかをより鮮明に伝えた方が興味を持ってくれることを学んだ。

マネジメント研修では司会者の進行のもと多彩なダンスグループが投稿してくれたダンスパフォーマンス動画をYouTubeで配信するというイベントを他団体が行っていたのでそれをメンバー全員で視聴した。本公演をオンライン上でどのように行うのかを学ぶために、カメラワークや進行者や出演者の動きなどに注目した。動画にすることで対面とは異なり編集などによりパフォーマンスのエフェクトを変えることが出来る利点があることを学んだ。

コロナ禍の影響で本公演を対面で行うことが難しくなったので、オンラインでの本公演を企画した。オンラインでの本公演開催は初めてということで実感がなかったので上記のマネジメント研修を通してイメージをより具現化しようと考えた。そしてミーティングでメンバー同士で役割分担をして本公演の準備を進めていくこうとしたが、幹部だけで話が進んでしまっていたり、今年度がちょうど10回目の本公演だったためきちんと開催したいといった意見もあり、次年度に行おうと今年度の開催は断念した。オンライン本公演を完成させるために例年よりも膨大な準備が必要だということを学んだので、次年度は最初から準備を始めていくことが必要だと分かった。

今年度の大きな反省としてはみんなで決めるべきことを幹部だけで決めてしまい、他のメンバーとの交流や情報共有が極端に減ってしまったことだと考えている。そのため幹部以外のメンバーがプロジェクト活動をしている実感が湧かないとの意見もあった。オンラインでのミーティングでは時間に余裕を持って動かないと参加してくれるメンバーが非常に少なくなることが分かった。何か情報を伝達する時に相手がその情報をきちんと理解しているのか確認できない、指示だしをするときにこまめにアドバイスをしたりして活動を円滑に進めることができない、何か質問を投げかけても相手からのレスポンスがすぐに返ってこない、こういった点がオンライン上でのプロジェクト活動の難しい点だと今年活動して感じた。リモートで幹部自身の出席率が低くなりがちなこの環境ではリーダーとサブリーダーがミーティングの指揮をとり、定期的に常に全体で話し合いが進む形を取るべきだと考えた。また、活動を迅速に進めるためになるべく余裕のあるスケジュール管理、積極的なレスポンスが大切だと感じた。

現状では、本公演が開催できなかったということもありメンバー全員のモチベーションが低下していたので、プロジェクト計画書作成をきっかけに、次年度どのように活動していくかをメンバーで話し合い少しづつ前向きに取り組んでいる。今後の活動では地域への広報、作品の創作、他団体のイベントに出展や参加を積極的に行うこと目的に、メンバー全員が一丸となったダンス動画を制作しようと考えている。

Beijo Me Liga

湘 南

達成目標

コロナで下がりきった心を振り払うような活気あるマルチカルチャーキャンプを行う。また昨年よりも多くの外国人学校の生徒と交流しあわい笑顔になれるような活動をしていく。笑顔とハグのあふれる社会に

学びのテーマ

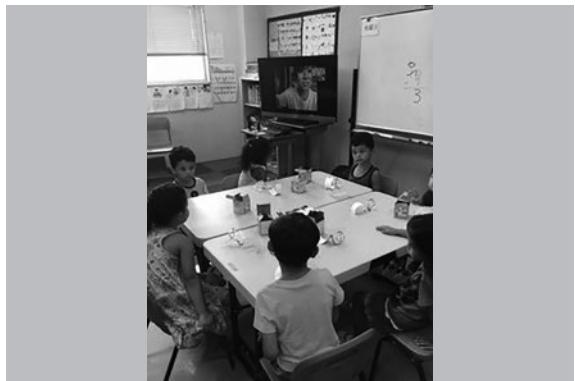
異文化交流から多文化共生の意義を学ぶ

リーダー	保田和真	教養学部国際学科	3年
サブリーダー	小澤俊太	文学部英語コミュニケーション学科	2年
	山縣りのん	健康学部健康マネジメント学科	2年
広報リーダー	篠田 賢	工学部航空宇宙学科	2年
会計	佐藤 駿	理学部物理学科	2年
アドバイザー	小貫大輔	教養学部国際学科	
コーディネーター	藤岡未妃	チャレンジセンター	

(参加人数 102名)

活動概要

外国にルーツのある子ども達を集め、互いの文化や思想を尊重し合いながら楽しく過ごすマルチカルチャーキャンプを開催する。これを通して彼らのアイデンティティを確立し自らの文化を愛しながら日常生活を送ることを目指す。また各地にある外国人コミュニティや学校のイベントを手伝い、繋がりを深めるとともに広報活動を行う。得意分野や興味のあることを活かせる場として参加者、メンバー共に自分らしくなる場所を目指す。



▶ オンライン形式で子どもたちとコミュニケーションを図る様子

プロジェクトとしてコロナ禍にどのように向き合って活動したか

私達は、コロナ禍で対面での活動が行えない分、正確に情報を伝達することが難しいと考え、より簡単な工作や絵を描くことを用いた内容かつ、異文化の理解につながる様なイベントを多く企画した。具体的には、Zoomを用いて風鈴という日本の夏の風物詩に絵を描くイベントや日本の紙芝居を読み聞かせるイベントを行うことで日本の文化の理解に繋げることができた。

また、今までの様な対面での活動が行えず、コミュニケーションを取る時間が少なくなってしまうために、活動に関わりのある在日外国人の方々との関係が疎遠になってしまったことも考えられた。そのため、各コミュニティの連絡係を筆頭に今まで行っていなかったビデオ通話や外国人学校の授業をZoomで体験させていただくなどして、関係性をより向上させるための活動も行った。それにより、コロナ禍での不満や困難について知ることができた。私達に求められていることが、新型コロナウイルスや給付金の申請の方法などの情報だということがわかったおかげで、普段よりも多くFacebookやTwitter、InstagramなどのSNSを活用し、それらの情報を伝えることができた。

さらに、イベントの頻度が少なくなったが故に、新入生や新たに関わりを持ってくれる人が見つけにくいのではないかと考え、SNSを活用した広報活動にも力を入れた。また、教授方にも協力していただき、興味のありそうな生徒にBeijo Me Ligaの活動について紹介していただいた。その結果、少数民族ながら興味を持っていたり、連絡を取り合った。上記のSNSを多く活用するにあたって、新たなBeijo Me Ligaのロゴの作成も行った。

今年度の活動で見えた次年度の課題としては、通信環境の改善もさることながら、対面での活動が出来ないが故の、活動頻度の向上やモチベーションの低下を防ぐことが挙げられる。課題解決のため、次年度は活動目標をより深く明確に設定する。そうすることにより、メンバー間のミーティングの質を向上させ、メンバー一人一人の意識を高めることができ、活動頻度の増加にもつながると考える。

また、各外国人学校の授業で使える教材や教育につながる映像を作成することで、教育の支援になると考える。教材や映像の作成は、時間や場所を問わず個々人でも行える。そのため、予定が合わずイベントやミーティングに参加できないメンバーも携わることが出来る活動となり、メンバーのモチベーション向上にもつながるのではないだろうか。

これらの課題に加え、今年度に企画していた活動を実現させることも今後の目標である。具体的には「Beijo Me Liga」のオリジナルマスクの作成やホームページの改良である。オリジナルマスク作りは、交流のある外国人学校の生徒や先生方とともに作ることにより、コロナ禍におけるマスクの重要性とそれに関連付けた知識の共有につながると考える。さらに、誰でも見ることができるホームページを国籍問わず見やすいものに改良することで、直接関わりのない方々にも情報を提供することが可能となるだけでなく、ホームページを軸としたSNSのさらなる活性化にも期待できることだろう。

Tokai Dream Space Team

湘 南

達成目標

高校生・大学生・社会人・企業の連携で、ものつくりイベントを成功させる

学びのテーマ

ものつくり、チームワーク、プロジェクトマネジメント、S&MA (Safty and Mission Assurance)

リーダー	森岡雅晴	工学部航空宇宙学科	3年
サブリーダー	天野由紀子	工学部精密工学科	3年
広報リーダー	田中 亮	工学部精密工学科	3年
会計	竹澤 良	工学部航空宇宙学科	3年
アドバイザー	岡田 工	チャレンジセンター	3年
	白澤秀剛	情報教育センター	
	日比慶久	現代教養センター	
コーディネーター	喜友名浩史	企画広報課	

(参加人数 48名)

活動概要

現在の社会では、新たな物事に挑戦し、確実な成功に結び付ける人材が広く求められている。そこで我々は、小学生から社会人まで幅広い世代を対象にした「ものつくり・プログラミング」教育イベントを企画・開催する。「ものつくり」「プログラミング」「プロジェクトマネジメント」「S&MA」という観点から、イベントの参加者にものつくりを楽しみながら、成長を実感できるような企画・運営を行う。



▶ IWRC2020 ペットボトルロケット製作解説動画

プロジェクトとしてコロナ禍にどのように向き合って活動したか

1月にTDST主催のものつくりイベント「Intelligent Water Rocket Competition 2020(通称:IWRC2020)」を実施した。このイベントは主に中学生～社会人を対象にしていたが、残念ながら参加者を獲得できなかった。本年度当初はIWRC2020を昨年度同様に湘南キャンパスに参加者を集めて開催する予定だったが、コロナ禍の影響で人を現地に集めてイベントを行うことが困難になった。そこで、コロナ禍でもイベントを実施するためにIWRCのオンライン化を行った。昨年度まで、競技説明、開発支援、競技等は極力開催地へ参加者に足を運んでいた。そのため、これらのやりとりを運営と参加者が遠隔で行えるように競技説明資料を作成し、TDSTのWebページへアップロード、ペットボトルロケット製作のやり方やレベル別に説明したプログラミング説明動画等をYouTubeにアップロードして公開、ペットボトルロケット打上動画の募集をし、その動画を審査するという方法に変更した。

今回作成したのは、イベント概要や参加方法を説明した動画、ペットボトルロケット製作・プログラミングを説明したものつくり動画、開発プロセスの種類を説明した動画である。イベント説明や開発プロセスの説明動画はPowerPointでスライドを作成し、説明を録音したものをiMovie等で編集し作成した。一方で、ものつくり動画はペットボトルの加工をしている様子を撮影し、説明をテロップで表示して作成した。作成した動画はWebEX Teamsに共有し、メンバー全員で動画の確認を行った。また、動画の視聴者に興味を持ってもらう目的でペットボトルを実際に打ち上げた動画の撮影も試みたが、打ち上げ場所の確保などの安全面の対策が十分にできず実現することができなかった。この点は、安全確保のやり方や根回しについての学びを得られたため、次年度活動に活かしていきたい。

広報については、YouTube, Twitter, InstagramのSNSからTDST Official Webページへ人を誘導するという体系でTDSTの活動の周知やIWRCの参加者獲得を目指した。結果として参加者の獲得にはつながらなかったが、Twitterフォロワー27名の増加、Instagramフォロワー33名、YouTubeチャンネル登録者5名の獲得に成功した。

今年度のプロジェクトはメンバー同士が直接集まって活動することはできなかったが、動画制作を通して技術力を身に付け、コミュニケーションをとりながらマネジメントを行った。このことから、「ものつくり」「チームビルディング・チームワーク」「プロジェクトマネジメント」の学びを実現できたといえる。

Sunflower

湘 南

達成目標

シェムリアップの校舎建設のために必要な資金の調達をする。また物資支援としてペンやノートなどの文房具類の支援を行う。さらに地域交流を通して渡航時のフィールドワークで学んだカンボジアの現状を広く共有していく

学びのテーマ

多様化していく国際社会に視野を広げ自ら考える力を養う、そして得た知識と経験の発信に挑んでいく

リーダー	鈴木晶太	政治経済学部経営学科	2年
サブリーダー	星野真緒	文学部歴史学科	2年
	近藤大介	教養学部国際学科	2年
広報リーダー	立石一登	文化社会学部広報メディア学科	2年
会計	佐藤日花里	教養学部人間環境学科	2年
アドバイザー	杉本 浩	文化社会学部アジア学科	2年
	妻鹿ふみ子	健康学部健康マネジメント学科	
	竹内友章	健康学部健康マネジメント学科	
コーディネーター	閔根広太	チャレンジセンター	

(参加人数 43名)

活動概要

Sunflowerは、カンボジアの子供達の教育支援のため、現地の方々との交流と日本での募金を主な活動としている。現地での活動としては、建設会社の方と協力し学校建設計画について話し合い、人々との交流を通して現状を調査する。日本では駅構内での募金活動や、イベントなどを通しカンボジアの魅力を発信する。以上の活動から、私たちは現地の子供達に夢を持ってもらうことを実現していく。



► カンボジアへの物資支援

プロジェクトとしてコロナ禍にどのように向き合って活動したか

私たちはコロナ禍において、ミーティング上での問題や予定していた企画の中止など様々な問題に直面した。最初に直面した問題としては、オンラインでのミーティングを行う際にどのツールを使用するのかという問題である。当初はZOOMのみを使用する予定だったが、このツールを長時間使用すると多額の費用が生じてしまうという問題が発生した。そのため、ZOOMの1時間無料機能のみを使用し、議論が長引く場合にはTeamsへ移動して話し合いを続行するという方法をとった。この方法を採用したメリットとして、新入生にも会議に対して参加しやすい状況を作り出すことができたという点を上げることができる。その理由として、ZOOMにはわかりやすく名前を変更し表示する機能があるため、関係が浅い状態であっても先輩や後輩の名前を覚えながら話し合いを行うことができたからである。

2つ目の問題としては情報発信についてである。昨年度までの情報発信では、カンボジアフェスティバルやほかの団体が開催しているイベントなどといった対面での発信を行っていた。対面での発信における利点としてはより深く相手に対して自分たちの活動を伝えることができるという点である。しかし、コロナの影響によって対面での情報発信ができなくなってしまったため、その対応としてTwitterやInstagramといったSNSでの発信を行った。SNSの中でも拡散力のあるTwitterでの発信を重視し、カンボジアの現状や活動の報告、新メンバーの募集を行った。Twitterでの情報発信を行ったことによって、新たなメンバーが所属してくれたり興味を持ってくれた方から連絡が来たりといった出来事があったためTwitterでの活動はとても効果的だったと考える。さらに、各自がカンボジアに関連する動画を作成し国際フェスへの参加をしたことによって、カンボジアの文化などを発信した。

次に募金活動についてである。募金活動でも対面での活動が行えないため、今年度はクラウドファンディングを行おうと考えていた。しかし現在の情勢を考えてみるとほとんどの人がコロナの影響によって余裕が無い状態となってしまっているため、支援者を募ることが困難だと判断しクラウドファンディングの延期を決定したのである。そのため、今年度の活動としてはクラウドファンディングを行うための準備や告知を重点的に行うことに対応した。

今年度は元々予定していた企画がほとんど中止になり、その対応として新たな策や企画を考えることが多かった。そのため来年度は「コロナ禍だからできなかった」では無く、「コロナ禍だからこそできた」という企画を増やしたいと考える。

Takanawa共育プロジェクト

高 輪

達成目標

主催イベントを充実化し、地域と大学の架け橋になる

学びのテーマ

地域貢献を通じて、地域における学生の役割を考える

リーダー	油谷 凜	情報通信学部情報メディア学科	2年
サブリーダー	太田龍宏	情報通信学部情報メディア学科	2年
	和田京子	情報通信学部通信ネットワーク工学科	2年
広報リーダー	東條龍之介	情報通信学部情報メディア学科	2年
会計	日下美音	情報通信学部情報メディア学科	2年
アドバイザー	崔 一煥	高輪教養教育センター	2年
	佐藤弘幸	情報通信学部通信ネットワーク工学科	
コーディネーター	吉村敬太	高輪教學課	
	高橋直也	高輪教學課	

(参加人数 34名)

活動概要

東海大学(高輪校舎)が高輪地区にとって必要な存在として認識してもらえるように、地域を盛り上げる活動をしていく。そのために地域の様々なイベントに積極的に参加・協力することや、プロジェクト主催のイベントを企画・運営をしていく。また、日常的に地域の方々との交流をはかるために、テニススクールや地域清掃などの定期活動に取り組む。これらの活動を通じて大学と地域の良好な関係を築き「地域の活性化」を目指す。



▶ えのっこだがし横丁

プロジェクトとしてコロナ禍にどのように向き合って活動したか

私たちは今年度の達成目標を「主催イベントを充実化し、地域と大学の架け橋になる」として活動を予定していた。これは、主催イベントを恒例化することで、より地域の方にこのプロジェクトに関心をもっていただくことができると考えたからである。しかし、新型コロナウイルスの影響を大きく受けたことで、主催イベントの恒例化はかなわなかった。その一方で、私たちは厳しい制限の中でも一年間活動を行ってきた。

まずは、オンラインでの活動である。学内外での対面活動が禁止されている状況であったため、メンバー間の繋がりを深める企画を行いプロジェクトとしての団結力を高めることから始めた。新たに企画したTKP夏の交流会ではオンラインレクリエーションを行い、メンバー間の交流の機会を設けるとともに今後のプロジェクト活動について話し合う機会にもなった。その後も各種ミーティングを開催し、コミュニケーションを図る企画を継続的に行なったことで、メンバーの力、協力がプロジェクト活動には必要だということをあらためて感じた。その他の活動としては、チャレンジセンターが主催した新メンバー勧誘企画のChallenge Weekに参加したのはもちろんのこと、高輪校舎が位置する港区が主催する「区長と区政を語る会(高輪地区)」にもオンラインで参加した。港区長、高輪地区に在住・在学の生徒・学生と高輪地区の魅力と問題点等について語り合うことができ、とても貴重な経験をすることができた。

次にオンライン以外での活動についてである。私たちは感染症対策を徹底し、二つの活動を行った。一つ目は、高輪二本榎町会が主催する「えのっこだがし横丁」に設営・場内整理・片付けといった形で参加したことである。子ども向けのイベントであったため、実際に対面で子どもの喜ぶ姿や笑顔を見ることができ、対面で活動することで得られるエネルギーの大きさをあらためて感じた。二つ目の「TKPと動画で遊ぼう」はたかなか子どもカレッジと共同で行った企画であり、遊びを教える動画を作成し子どもたちに視聴・体験してもらうというものである。動画の作成は、撮影を校舎内で少人数で行い、編集作業をオンラインで行うといった、新しい形の取り組みとなった。これらの活動により、例年の活動では知ることのできなかった新たな発見があり、今後に活動していく上での大きな収穫となった。

例年通りの活動ができなかったコロナ禍において、今までとは異なる視点で物事を捉えて活動していく中で、自分たちにできることを模索し実行に移していく難しさや、対面で交流することの大切さを知ることができた。また、メンバー同士が意見を出し合い、協力することで新しい活動に取り組むこともできた。これらの経験から私たちメンバーは4つの力である「自ら考える力」、「集い力」、「挑み力」、「成し遂げ力」を体得できたと感じている。今回の経験や反省を活かすことで、今後は今まで以上に社会状況に柔軟に対応し、高輪地域の皆さんのがんばり支えになれるようなプロジェクト活動を継続していきたい。

先端技術コミュニティACOT

熊本

達成目標

ドローン訓練、アプリ開発で得た技術や知識での地域貢献

学びのテーマ

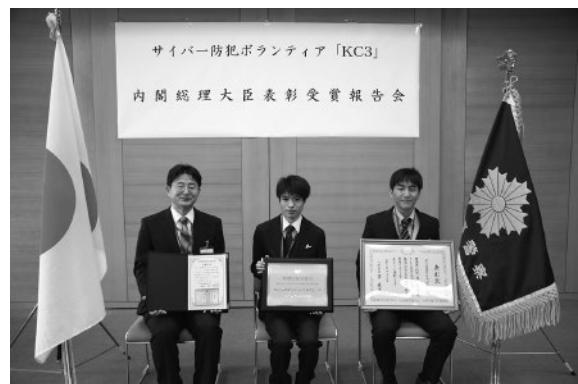
社会で求められている知識・技術を習得し、それらを地域貢献等で実践するスキルを学ぶ

リーダー	和泉田刀麻	基盤工学部電気電子情報工学科	3年
サブリーダー	松田雄志	基盤工学部電気電子情報工学科	3年
	日高涼太	農学部応用植物科学科	2年
広報リーダー	丹澤健太	農学部応用植物科学科	2年
会計	古田奈津実	農学部応用植物科学科	2年
アドバイザー	八尋剛規	九州教養教育センター	
	福崎 稔	九州教養教育センター	
コーディネーター	加藤潤一	九州教養教育センター	
	六嘉孝裕	九州教養教育センター	

(参加人数 14名)

活動概要

今年度は新型コロナウィルスにおける活動自粛に伴い、可能な限りの活動とする。基本的にはオンラインでの活動となる。オンラインミーティングを隔週で開催し、対面での活動は少人数で行い、配信することで感染症対策に努める。熊本県警と協力し、サイバー犯罪の防止を目的としたサイバー防犯ボランティア。ドローンを使った空撮(安全を確認できる場合のみ)また、ウィルスによる感染の危険がなく、イベント参加の許可が下りた時のみ、依頼されたイベントへの出展をする。



▶ 内閣総理大臣賞受賞

プロジェクトとしてコロナ禍にどのように向き合って活動したか

今年度はコロナウイルスの影響により、プロジェクト活動が10月頃から始まった。6月からオンラインのみでの活動をしていたが、かなり厳しいものがあった。オンラインでの活動としては、隔週程度でオンラインミーティングを開催することでコミュニケーションや健康状態の確認を行った。また、サイバー防犯ボランティアの啓発活動、来年度の活動内容の確認などを行った。さらに、今年度は対面での新入生歓迎会を行うことができなかったため、Challenge Weekという形で、Teams内で主に新入生を対象とした説明会を行ったが、初めての試みということもあり、オンラインで行うことの難しさを感じた。サイバー防犯ボランティア活動に関しては熊本県警の方や他大学の皆様の協力もあり、内閣総理大臣賞を受賞することができた。対面での活動に関しては、規模や人数を縮小してイルミネーションの設営を企画したが、緊急事態宣言の発令により、断念となった。1月には本プロジェクトに興味を持ってくれた1年生を対象としたガイダンスを行い、アイスブレイクをすることで円滑なコミュニケーションをとることができた。また、プロジェクトに参加してくれている1年生のモチベーションを維持するためにオンラインでのPC組み立て教室、プログラミング勉強会を行った。PC組み立て教室に関しては対面での組み立て作業にかかる人数を3人程度とし、Teamsで配信を行った。プログラミング勉強会に関してはProcessingを使い、Javaで簡単なゲームを作成しながらプログラミングの勉強をしてもらった。提出期限を設け、1年生は期間内でどのような形で自分の作品を完成させるかを考え、積極的に質問をしていたので、有意義な活動であると感じた。2月には本プロジェクトが例年行っていたドローン空撮のための訓練を再開した。授業が終了しているため2号館4階を使わせていただき、200g以下のドローンを1年生を交えて飛ばすことができた。また、今回新たに購入したDJI mini 2が200g以下であったため、こちらも訓練に使用することができた。3月にはイルミネーション企画での課題点を踏まえて桜のライトアップを企画している。コロナ禍における感染症対策として設置人数を5人までとし、検温、アルコール消毒は前提のもと、規模を例年の4分の1程度にすることで感染症対策を行う予定である。また、企画の趣旨を東海学園前駅側からの鑑賞を目的とすることで校内での感染症対策にもなると考えている。これからもコロナ禍による社会の混乱は避けられないと思うので、様子を見つつ活動を続けていくたい。

阿蘇援農コミュニティープロジェクト

熊本

達成目標

学生一人一人が農業に触れる機会を増やし、援農活動を増やすだけでなく、農家さんとのやり取りを増やし地域活性につなげる

学びのテーマ

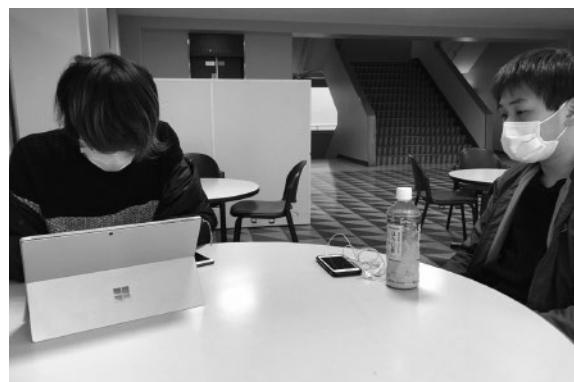
農業に対する知識、技術の習得と熊本の地域活性と社会貢献

リーダー	河井大明	農学部応用植物科学科	3年
サブリーダー	森山竜二	農学部応用植物科学科	3年
広報リーダー	黒木伸哉	農学部応用植物科学科	3年
会計	中川啓也	農学部応用植物科学科	3年
アドバイザー	阿部 淳	農学部応用植物科学科	3年
コーディネーター	高橋誠二 馬原賢信	九州教学課 九州教学課	

(参加人数 79名)

活動概要

阿蘇援農コミュニティープロジェクトは主に熊本の阿蘇地域を中心に、農家さんのもとへ訪れ、作業を手伝うという活動を行っている。しかし、ただボランティアとして活動するだけでなく、学生は労働力を、農家さんは知識と技術を教えるという相互関係を成立させることに重点を置き、取り組んでいる。創立から約十年が経ち、現在では阿蘇以外での活動を行ったり、テレビや新聞などのメディアに取り上げて頂いたりと、熊本県で少しづつその活動は認められてきている。



► ミーティングの様子

プロジェクトとしてコロナ禍にどのように向き合って活動したか

私たち阿蘇援農コミュニティープロジェクトは2019年度の活動回数が2018年度と比較し、激減したことを課題とし、活動回数の増加と今まで行って来なかつた新たな活動を始動させるために取り組んだ。まず、活動回数が激減したことについて、学生の阿蘇援農コミュニティープロジェクト(以下「援農」略称)での活動に対してのモチベーションの低下が大きな原因であった。援農での活動は肉体労働が中心のため、女性や一人での参加がしづらいという意見が上がった。そのため私たちは次の考えを元に年間のスケジュールを作成した。1.横と縦の繋がりの強化 2.援農の意識の低下防止 3.告知の迅速化、増加である。1つ目の「横と縦の繋がりの強化」では、参加しやすい環境づくりを改めて見直した。新入生歓迎会での新入生への声掛けをより積極的にしたり、LINEや電話を利用し、直接援農活動を勧誘したりなどの、新一年生への勧誘の取り組みに力を注ぐことを計画した。2つ目の「援農の意識低下防止」では、援農活動以外にも、スポーツ大会や阿蘇、天草への研修、地域清掃などを企画し、他の活動に参加してもらうことで、援農活動への参加のハードルを下げつつ、援農への意識が低下しがちな梅雨の時期や冬季の意識の低下防止を計画した。3つ目の「告知の迅速化、増加」では、夏季の農作業の活動と依頼が毎年多い現状の中で、他県からの学生が多い東海大学では、夏季休暇で帰省する生徒が多く、依頼に対して人員が不足し、残念ながらお断りすることが多々ある。なので、予め活動の予定日を設定しておき、それに合わせて帰省してもらい、また、告知の回数を増加させ、会議や活動の日時を忘れないように防止させることを計画した。しかし、私たちが幹部を務め、会議を重ねたこの計画は一度も行う事はなかった。特に現地での労働、3月から10月に活動の中心を置いている我々は出来ることが何もなかった。しかし、条件付きで活動が再開できるとなった際も私たちは現地へ訪れての活動を行わなかった。それは、学生が持っていたコロナウイルスから感染してしまった場合を危惧したからである。私たち学生は年齢が若いという要素から、感染した際も助かる可能性が高い。しかし農家さんは状況が違う。一人で農業をやられている方、高齢の方、家族が多い方など、感染した際のリスクの重さと数が圧倒的に多い。万が一、学生経由で感染という事例を作ってしまった場合、今まで築いてきた農家さんとの信頼関係や他のチャレンジプロジェクトへの影響を考慮し、強い意志を持って2020年度は一度も活動を行わないという選択肢を私たちは選んだ。

阿蘇は箱舟プロジェクト

熊本

達成目標

オオルリシジミやダイコクコガネ、アソノコギリソウなどの阿蘇地域に生息・自生する貴重な動植物を守るために阿蘇の草原維持。また、イベントなどを通じて多くの人々に阿蘇の自然を知ってもらう

学びのテーマ

保全活動を通じて広報活動、計画力の重要性を学ぶ

リーダー	永野智大	農学研究科農学専攻修士課程	院1年
サブリーダー	金子拓未	理学部情報数理学科	3年
	西俣君音	農学部応用植物科学科	4年
広報リーダー	宮本貴香子	農学部応用植物科学科	4年
会計	中内拓海	農学研究科農学専攻修士課程	院1年
アドバイザー	村田浩平	農学部応用植物科学科	
	岡田工	チャレンジセンター	
コーディネーター	金子博	農学教育実習センター	
	永田莞也	九州教学課	

(参加人数 117名)

活動概要

阿蘇地域は、全国的にも貴重かつ固有の動植物が生息している。本プロジェクトは、オオルリシジミをはじめとした阿蘇地域に生息する絶滅危惧種の生息環境の保全に取り組むとともに広報活動として阿蘇の自然環境や保全活動の紹介を行う。また、阿蘇の昆虫を標本にすることで、昆虫の記録と遺伝子の保管を行う。これらの活動を通じて、生物多様性の豊かな阿蘇の自然環境を保全し、後世に残し伝えることを目的として活動するものである。



▶ 除草作業の様子

プロジェクトとしてコロナ禍にどのように向き合って活動したか

今年度はコロナウィルスの影響により、本プロジェクトの主だった活動であるパトロール活動、昆虫展などは実施できていない。しかしながら、野外での活動として除草活動を実施し、これまで以上にインターネットでの活動に力を入れ、ホームページやTwitter更新を重点的に行い、新たな活動としてリモートでの講義や発表会に参加した。今年度は小規模ではあったが、2度の除草活動を実施したことにより、本プロジェクトの活動目標であるオオルリシジミやダイコクコガネ、アソノコギリソウなどの阿蘇地域に生息・自生する貴重な動植物を守るために阿蘇の草原維持に寄与した。また、インターネットを利用した活動として、ホームページとTwitterの更新に力を入れた。ホームページ更新では本プロジェクトの紹介項目を充実させ、活動紹介の動画を掲載し、より簡単にプロジェクトの概要を見られるようにした。Twitterでは新たに標本の作り方動画の投稿を開始し、海外に向けた英語での投稿も始めた。また、ホームページに掲載している阿蘇の昆虫のデータベース作成では、新たに昆虫を11種追加し合計106種となった。今年度は、前年度までのデータベースを大幅に見直し不備があった箇所の修正、古いデータの更新に力を入れ、新たに標本を多数作製した。リモートの活動としては、環境省阿蘇くじゅう国立公園管理事務所から①小学生を対象とした「草原環境学習」、②阿蘇に関係する小学生～大学生までが研究成果をまとめ発表を行う「こども地域学習発表会」の依頼を受けた。これらの活動では、パワーポイントのスライドや保全活動についてのアニメーションを作成し発表した。アニメーションの作成ではイラスト、声あて、動画編集をプロジェクトメンバーとインターネットを通じて作業を分担した。インターネットでの活動を通じて、コロナ禍で活動人数が制限される中、より多くのプロジェクトメンバーが参加できる活動を計画・実践し、本プロジェクトの目標である「多くの人々に阿蘇の自然を知ってもらうこと」ができた。

今年度はこれまで長期にわたって阿蘇地域の保全活動に寄与したことが環境省に評価され、環境大臣賞を受賞し、これに伴って松前重義賞を受賞した。この賞はこれまで活動を継続して行ってきた先輩方や民間ボランティア団体の方々、地域住民の方々の協力があったからこそ得ることのできた賞であり、今後も様々な機関と連携し、阿蘇の自然環境の保全に貢献していく所存である。

一方、湘南校舎ではインスタグラムやTwitterを中心とした活動を実施した。インスタグラムでは一般の方に自然について興味をもって頂くことを目的として、身近な自然の写真とその解説を発信し、フォロワーを52人獲得した。Twitterでは阿蘇の昆虫やオオルリシジミの生態をイラスト、写真、動画を用いて解説した。また、小学生を対象としたリモート学習として、牛乳パックを使用したランタン作成及び環境に関するクイズイベントを企画し、実施した。

あにまるれすきゅープロジェクト

熊本

達成目標

人間に捨てられたり、迷子になったりする犬や猫を減らし、殺処分される命を減らすこと、そしてプロジェクトメンバーやそれ以外の人に日本の殺処分の現状を理解してもらい、命について考えてもらうことである

学びのテーマ

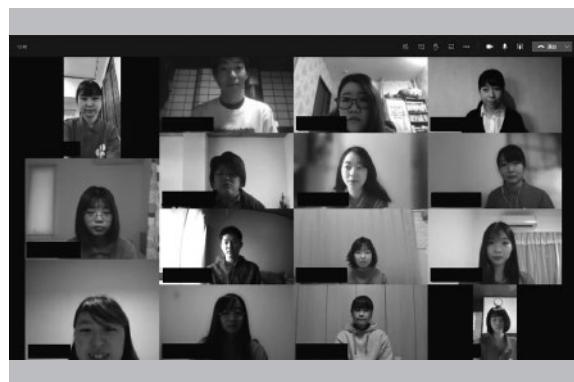
保護された犬や猫と触れ合い、命について考える

リーダー	田中 碧	農学部応用動物科学科	3年
サブリーダー	平根鈴華	農学部応用動物科学科	3年
	野田良多	農学部応用動物科学科	3年
広報リーダー	川崎愛実	農学部応用動物科学科	3年
会計	森山加子	農学部応用動物科学科	3年
アドバイザー	森友靖生	農学部応用動物科学科	3年
コーディネーター	佐藤良彦	九州事務課	3年
	神鷹孝至	農学教育実習センター	

(参加人数 52名)

活動概要

本プロジェクトは、愛護団体や県や市の職員の方々と協力して、捨てられたり地震の被害にあった犬や猫のお世話や譲渡のお手伝いを活動の中心としている。併せて、イベントやSNSでの啓発活動や里親募集を行っている。このような活動を通してプロジェクトメンバーにとどまらず多くの人に日本の殺処分の現状を知ってもらい、動物を捨てることや命について考えてもらうことを目的に活動している。



▶ オンラインミーティングの様子

プロジェクトとしてコロナ禍にどのように向き合って活動したか

私たちは熊本校舎にて、動物愛護団体や熊本県・熊本市の職員の方々と協力して、捨てられたり、地震の被害にあったりした犬や猫のお世話や譲渡のお手伝いを積極的に行い、殺処分数を減らすこと。併せて、啓発活動を通してプロジェクトメンバーにとどまらず多くの人に、日本の殺処分の現状を知ってもらい、動物を捨てることや命について考えてもらうことを目的に活動を行っている。

例年は主に、動物愛護団体フィリアによる譲渡会の参加、動物愛護団体きずなの丘のお手伝い、熊本県・市愛護センターのイベントへの参加、株式会社大劇のシェルターでのお手伝い、獣医師の方を招いての勉強会などを行ってきた。

また、今年度から、今までの熊本での活動が認められ、熊本市動物愛護推進委員に推薦していただき、活動することになった。

しかし、今年度は新型コロナウイルスの影響により活動が制限され、対面での活動を主に行っていった私たちは例年通りの活動ができなかつたが、今年度は、主にSNSを使った里親募集、啓発活動を行った。

まず、SNSにて株式会社大劇のシェルターで飼育されている犬8頭の里親募集を行った。実際に、彼らを触ったことのあるメンバーが、投稿を見た人に少しでも興味を持ってもらえるような写真とコメントを考え募集を行った。残念ながら、実際に里親が決まった犬はいないが投稿に多くの方からアクションが行われた。

次に、「#動物愛護作品紹介～動物や動物愛護に関する作品に触れようキャンペーン～」と題して、メンバーが動物や動物愛護について考えるきっかけになればと思い、動物や動物愛護に関する書籍や映像作品についての紹介文を募集した。結果、募集期間中に9作品の紹介文が集まった。その後、学内外の方々に動物や動物愛護に触れてもらえるきっかけになるのではないかと思い、集まった紹介文をSNSに投稿した。ここで集まった9作品に関しては、今後の勉強会で鑑賞したり、学園祭などのイベントで紹介文とともに掲示したい。

そして、オンライン動物愛護センター見学会という、少数の学生が職員さんと愛護センターを周りながら掛け合いをする様子を、Teamsを使いリアルタイムで届けることで、画面を通して見学しているような雰囲気を感じてもらうことを目的とした企画を考えたが、対面かつ学校外で活動するための準備が出来ず、今年度は実現できなかった。

来年度は、上記のオンライン動物愛護センター見学会の実施、獣医師の方から対面ではなくオンラインでお話を伺う勉強会を行いたい。

私たちが活動が出来ず会えなくなっているだけで、保護されている動物は多く存在し、決していなくなっているわけではないこと、多くの人に知つてもう一度プロジェクト内で確認し、この活動を続けていきたい。

札幌ボランティアプロジェクト

札幌

達成目標 冬季の除雪活動を中心に、地域に貢献する

学びのテーマ 地域の需要を知り、地域に根差した活動をする

リーダー	黒野春華	国際文化学部地域創造学科	3年
サブリーダー	大黒滉平	生物学部海洋生物科学科	3年
	黒崎真摘	生物学部海洋生物科学科	3年
広報リーダー	田中元晴	生物学部生物学学科	3年
会計	小川慎史	生物学部海洋生物科学科	3年
アドバイザー	植田 俊	国際文化学部地域創造学科	3年
	田川正毅	国際文化学部デザイン文化学科	
コーディネーター	松島佑介	札幌事務課	
	番場 浩	札幌教學課	
	鈴木啓司	札幌教學課	

(参加人数 19名)

活動概要

当プロジェクトが毎年実施している除雪活動は、自力除雪が困難な高齢者の多い札幌市南区にとって不可欠なものとなりつつある。また夏季は学内でのラベンダーまつりの運営や地元南区でのボランティア活動等に参加し地域住民との関係づくりに尽力している。現在、札幌キャンパスの学生が日々学んでいる知識や技術を地域の子どもたちに還元できる環境教育やスポーツイベントなども計画中である。



▶ 札幌ボランティアプロジェクト主催「WEB交流会」のポスター

プロジェクトとしてコロナ禍にどのように向き合って活動したか

コロナの影響でラベンダーまつりや地域の祭りなど恒例イベントが中止になり、活動の柱になっている除雪活動に関しても高齢者との接触、移動時の感染リスク、さらにはメンバーの帰省に伴い、活動ができない状況でのスタートとなった。

これまで札幌ボランティアプロジェクト(以下ボラプロ)の活動は地域の方々を対象としており、全てが対面でのボランティアだったので、感染症対策に伴う活動制限は大きな制約となった。そんな中、私たちが行った活動は「1年次生を対象としたWeb交流会」であった。ボランティアの対象を身内である学部生にしてよいのかという議論もあったが、困っている人の需要に対応するすることがボランティアであると意見がまとまり、すぐに実行に移すことにした。

新型コロナの影響で友人づくりのきっかけが少ない1年次生に交流の場の提供を目的にWeb交流会は2回開催し、第1回はボラプロメンバーとの交流会、第2回は第1回参加者の意見要望を参考にした「サークル活動紹介」を行った。第1回の交流会は参加人数10名と少なめであったが、参加者の満足度が高く、すぐに第2回の交流会の計画を作成した。第2回の交流会「サークル活動紹介」には札幌キャンパスの公認団体18団体、1年次生40名が参加した。公認団体の代表者に尋ねたところ、どのサークルも新入部員への引継ぎができず、廃部の可能性もあり、このような機会は大変ありがたかったという意見が数多くあった。どちらも高評価の交流会で、1年次生やサークル代表者の需要に対してしっかりと対応できた内容だと考えている。

冬季の除雪活動についてはこれまでの除雪のやり方を見直し、徒歩での移動、グループではなく単独での除雪活動計画をコーディネータに相談したが、安全対策上、単独での除雪は危険と判断され、活動を休止した。除雪の対象エリアはキャンパス周辺とはいえ、徒歩で40分以上かかる世帯もある。車両移動に伴う感染リスクを解決する手段はなかったが、次年度はキャンパス周辺の公共エリア(ゴミ捨て場・バス停・消火栓)などの除雪を視野に入れ、少しでも地域にむけた活動ができればと考えている。

最終報告会でもお知らせした通り、コロナを言い訳にするのではなく、この状況下でもできる地域貢献を次年度の目標にしたい。具体的にはボランティアの対象を高齢者から児童にシフトし、感染リスクの少ない活動を計画中である。その前段階として、今年度は、7月に市内の環境コンサルタント会社 株式会社エコテック主催が主催する札幌市立石山緑小学校 総合学習における環境教育を視察した。ボラプロメンバーの中には生物学部の学生も多く、大学で学んだ知識を地域に還元できる方法を模索している。

ユニークプロジェクト／メディア掲載

2020年度ユニークプロジェクト一覧

校舎	プロジェクト名称	概要	校舎	プロジェクト名称	概要
湘南	Connect	近隣の住民の方々に居場所を提供する他、地域の子ども達へ学びを提供する。 過去3年に及ぶ活動で得た信頼、経験を大切にすることを前提とし、さらに社会教育、学校教育を行う施設や団体と協力し、新たな地域の問題や課題に取り組む。具体的な活動としては近隣小学校で行っていた子ども食堂の再開を目的とした活動を計画している。	熊本	阿蘇復興への道	熊本地震を経験している先輩方が卒業し、なぜ自分たちが南阿蘇に行ったり、新栄荘の大家さんたちと関わっているのかがなんなくしか分かっておらず、阿蘇復興への道という名前で活動しているのに熊本地震についてよく知らないメンバーもいるため、まず自分たちが熊本地震について知る。またそのために当時大家業をされていた方たちと交流を深めながら当時のことを教えていただく。その中で、南阿蘇の方のところへお手伝いをしに行ったり自分たちも語り部を行ったりする。
	ポリヘドロン工作隊	小中学生が苦手とする図形、幾何学の分野を工作を通して不得意分野から好きな分野に変えてもうるために全国のイベントに出向き、楽しながら理解をしていただくように工作教室を行っている。また、今年度はコロナの影響で自粛生活でイベントに参加できない人も多いと思うので、そういった方とイベントの際にかかわり社会の状況を知り、自分たちがレベルアップするのも目的の一つである。		動植物園プロジェクト	熊本市動植物園には動物園と植物園があり、動植物を飼養栽培して展示している。動植物園では種の保存・生物多様性保全への貢献、環境教育の実践、動物愛護管理を目的としており、私たちは「教育」について目指し、解説版製作やイベントボランティアなどの活動を通して環境教育の基盤を強化とともに野生動物の生態や環境保全について学ぶことを目的とする。
高輪	NSテクノロジーズ	E Tソフトウェアデザインロボットコンテスト(以下ETロボコン)2020に出場する。またCQE EVミニカート・レース(以下EVカート)の10月4日の大会に出場する。ETロボコンでソフトウェアはモデリングベース開発や今までとは違うシミュレーターによる仮想上のロボットの開発の学習をしたい。EVカートでは新しいメンバーでEVカートの基礎から応用まで一から学んでいきたい。		熊本地域プロデュースプロジェクト	我々熊本地域プロデュースプロジェクトは熊本の「地域の魅力の再発見、再発信」を活動理念に活動している。この活動理念を設定したのは、地域の過疎化高齢化問題を観光により解決することは出来ないかと考えたからである。この活動理念を達成する為に我々は、地域で住民と共にイベントの開催を行っている。現在、阿蘇エリア、天草エリア、大隅周辺を中心に活動している。
清水	ワンダフル・マリンアニマルズ	本プロジェクト「ワンダフル・マリン・アニマルズ」は、自作の水中生物を模したロボットを作製し水中で泳がせる実演会を行うことで、来場者が水中生物とそれらの生物が生息する環境について理解するきっかけとすることを目的として活動を行う。特にの中でもゴミ問題及び水中生物がゴミ問題から受けている影響を併せて説明することで、来場者のゴミ問題への意識向上に繋げることも目標とする。	阿蘇	阿蘇環境プロジェクト	阿蘇地域について、生態系と水循環の両面から環境調査を行い、熊本地震後の環境変化とその後の回復過程を記録に残すとともに、阿蘇地域の雄大な自然を広く発信することで阿蘇地域の復興を支援することを本プロジェクトの目的とする。そのため、植生調査、水質調査を行い、その結果を発信するWebページの作成を行う。
	三保活性化プロジェクト	今年度の三保活性化プロジェクトの目的は、ボランティア活動を通じて三保の活性化を図ることである。三保半島に住む子供たちだけでなく、地域の方々と大学生の交流の機会を増やすことで三保の活性化に協力したいと考える。今年度は、10月から活動開始のため、12月に行われるキッズランドとワクワクランドの2回のイベントを行う。		地域連携プロジェクト	昨年度までは、主に「札幌市南区以外の多くの人にも良さや魅力を発信していく」という目標を掲げて活動してきたが、更に発展させより多くの方々に南区に行きたくなる魅力を発信すると共に、これまで鍛え上げてきたデザイン・地域連携の手法に磨きをかけ、更なる成果をあげる。
札幌	商品開発プロジェクト	静岡の名産物、特産品を使用し、新しい商品を開発する。開発した商品で静岡県を豊かにし、より活性化することを目的とする。そして私たち学生は、開発することの魅力や苦悩を感じ、人と協力する為の組織づくりを学び、且つ地域の方と触れ合うことによって社会人としての基礎力を身に付ける。また、開発した商品を「長く愛される」商品へと日々繋げていく。	札幌	ビオトープをつくろう会	グラウンドの貯水池を活用しつくられたビオトープを維持・管理する。敷地内に生息する水生生物を保全するために必要となる対策を考え、適宜備品をそろえ実行する。内部の水位変動の経過観察を行うことで、生物たちが環境の変化にどのような影響を受けているか把握する。また、敷地周辺に形成されている生態系を調査し、ビオトープが生態系に果たす役割を考察する。
	Shark Amazing Project	サメについての専門的な知識や技術を身に付けSNSやイベントを通して、サメの良さや正しい情報を一般に広めていくことが目的である。特に地域のイベントを通して一般の方々とのコミュニケーションをとることで地域貢献もしていきたい。また地域との関りを深めていくことで、プロジェクトそのものの知名度をあげ活動の幅を広げていくことも目的とする。社会状況に鑑みて、今年度は特にSNSでの活動に重きを置きたい。		しきおりプロジェクト	光風園というたくさんの動植物が生息する実習林があり、山菜採りなど人為的影響が多かった以前に比べ採集の禁止の呼びかけなどにより自然が回復してきた歴史がある。そこで自分たちで、四季の移り変わりによる生物種を観察し記録することで、今後どのように変化していくか知ることができる。その情報をHPやパンフレットといったもので情報発信し学生や近隣住民の方に身边に残る貴重な自然と保全の大切さを知ってもらう。

2020年度メディア掲載一覧

校舎	プロジェクト名	掲載・放映日	メディア名	メディア分類
湘南	ライトパワープロジェクト	12月25日	タウンニュース秦野版	情報誌・WEB
		7月15日	モーターファン・イラストレーテッド	書籍
		8月10日	読売新聞	新聞
		12月8日	YouTube「seeker」「LIGHT SPEED」	YouTube
		2月15日	モーターファン・イラストレーテッド	書籍
熊本	先端技術コミュニティACOT	11月21日	熊本日日新聞	新聞
		12月15日	RKK「夕方Liveゲツキン」	TV
		1月15日	熊本日日新聞	新聞
		2月1日	T1パーク	雑誌
	阿蘇援農コミュニティープロジェクト	2月15日	朝日新聞	新聞
	阿蘇は箱舟プロジェクト	9月17日	NHKニュース「ニュース845くまもと」	TV
		2月19日	朝日新聞	新聞

1年間の活動記録

月	プロジェクト名称	企画	概要
4月～5月	日本国内における新型コロナウイルス感染症の感染拡大状況に鑑み、大学構内への入構および課外活動が禁止となった。これに伴い、チャレンジセンターにおいても全キャンパスのプロジェクト活動を停止とした。		
6月	病院ボランティアプロジェクト	絵本動画化企画	YouTubeにて2019年度制作絵本「おててきれいにできるかな?」を病ボラメンバーで声当てし投稿した。
	Tokai International Communication Club	にこティー教室（6月～8月）（10月～2月）	毎週水・木曜日の17時30分～19時の間、外国にルーツのある子どもたちの学習支援を行った。例年は秦野市の公民館で支援を行うが、コロナ禍のためZoomにて実施。
	あにまるれすきゅープロジェクト	里親募集（～8月）	SNSにて、大劇さんで保護されている犬8匹の里親を募集した。
7月	チャレンジセンター	Challenge Week	在学生を対象にチャレンジプロジェクトがオンラインでの5日間の新入生ガイダンスを実施した。
8月	サイエンスコミュニケーター	サイエンスリンク・オンライン	YouTubeを利用して、工作実験を配信。
	Beijo Me Liga	Beijo×Himawari風鈴づくりイベント	Beijo Me Ligaとひまわり学園をZoomで繋ぎ、一緒に風鈴づくりをおこなった。
	先端技術コミュニティACOT	サイバー防犯ボランティア	オンラインでの、Twitterの通報機能を用いたサイバー犯罪防止活動。
	あにまるれすきゅープロジェクト	迷子犬の捜索（～12月）	SNSにて、8月に熊本市で行方不明になった犬の情報を集めた。
9月	あにまるれすきゅープロジェクト	#動物愛護作品紹介（～12月）	メンバーが期間中に動物や動物愛護に関連する映像・文章作品を鑑賞し、SNSを使ってプロジェクト内・プロジェクト外に作品を紹介した。
10月	キャンバスストリートプロジェクト	C.A.P.の広報講習会	コロナ禍での活動でSNS等を利用する機会が増えたので、情報発信の利点と危険な点を学んだ。
	Tokai International Communication Club	翰林日本語学院生とのオンライン交流会	横浜市にある翰林日本語学院の生徒との交流会。例年は学校に訪問して交流を行うが、コロナ禍のためZoomにて実施。TICCメンバーが発案した日本文化に関するクイズゲームを行った。
		東海大学の留学生とのオンライン交流会（～1月）	東海大学の留学生（別科在学生）を対象に計20回の交流会を開催。別科日本語研修課程の先生方のご協力のもと、授業時間の一部や昼休みにクイズゲームや会話を通して交流を行った。Teamsにて実施。
11月	札幌ボランティアプロジェクト	WEB交流会「Make New Friends～新しい繋がりを～」	1年次生を対象としたWEB交流会。ボラボメンバーカ司会を務め、少人数のルームに分け、様々に意見交換を実施。
	Tokai International Communication Club	ハワイ大学ウェストオーフ校学生とのオンラインによる国際交流会	ハワイ大学ウェストオーフ校の依頼により開催した計3回の交流会。TICCメンバーは、イベント参加者として参加。両学生同士で自己紹介をし、両学生の特技・趣味に関するクイズやミニゲームを通して交流を行った。Zoomにて実施。
		Takanawa共育プロジェクト	港区長と区政を語る会（高輪地区）
12月	キャンバスストリートプロジェクト	クリスマスU-night 2020	地域活性への貢献を目的に、東海大学前駅をイルミネーションで飾装した。また、SNSで写真を集めてクリスマスの写真アートを作成し、SNS上で公開した。駅の装飾には、秦野市立大根幼稚園の協力のもと、クリスマスオーナメントも制作し、イルミネーションと共に展示了。
	Beijo Me Liga	オブソングリスマスツリーづくり	Beijo Me LigaとオブソンをZoomで繋ぎ、一緒にクリスマスリースを作ることで交流した。
	Tokai Dream Space Team	Intelligent Water Rocket Competition 2020動画投稿	ペットボトルロケット製作の解説動画をYouTubeに投稿し、打上動画の募集をした。
	札幌ボランティアプロジェクト	WEB交流会第2弾「サークル活動紹介」	1年～2年次生を対象としたサークル活動紹介。18団体によるサークル活動の紹介と勧誘。
2021年1月	Tokai International Communication Club	For the Future～グローバル化していく日本社会～	「第12回 多様化するセクシャルマイノリティに対して私たちはどうあるべきか～セクシャルマイノリティ～」をテーマに、在校生と一般の方を対象としたシンポジウムを開催。Zoomにて実施。
	Beijo Me Liga	ひまわり読み聞かせ	Beijo Me Ligaとひまわり学園をZoomで繋ぎ、三匹の子豚の紙芝居を読み聞かせた。
	阿蘇は箱舟プロジェクト	令和2年度こども地域学習発表会	阿蘇に関係する小学生～大学生までが研究成果をまとめ発表を行なうイベントに参加。
2月	チャレンジセンター	最終報告会	2020年度のプロジェクト活動について、各プロジェクトが5分程度の活動報告動画を制作し、お互いのプロジェクト活動についてオンラインにて報告した。活動報告動画は、大学公式YouTubeチャンネルでも公開された。
	病院ボランティアプロジェクト	絵本動画化企画	YouTubeにて2018年度制作絵本「おくすりってどんなもの？」を病ボラメンバーで声当てし投稿した。
	Beijo Me Liga	オブソングリュンごま作り	Beijo Me LigaとオブソンをZoomで繋ぎ、日本の伝統的な遊びであるビュンビュンごまを牛乳パックなど身近なもので一緒に作った。
	Takanawa共育プロジェクト	TKPと動画で遊ぼう	たかなかわ子どもカレッジとの共同企画。マジックやカップダンスなどの「遊び」に楽しんでチャレンジできる動画コンテンツを作成し、児童に視聴・体験してもらった。
	阿蘇は箱舟プロジェクト	紙パックでランタンを～家に灯りをともせ～	小学生を対象とした牛乳パックを使用したランタン作成及び環境に関するクイズイベント。
3月	チャレンジセンター	最終報告会表彰式	最終報告会での審査により決定した上位3プロジェクトに「グッドプロジェクト賞」が授与され、山田清志学長と受賞プロジェクトの代表者との対談も行った。表彰式の様子はライブ配信され、全プロジェクトの学生もオンライン形式で参加した。
	病院ボランティアプロジェクト	絵本制作	子ども向けに健康知識を届けるために健康情報を絵本にして地域の幼稚園・保育園に送付した。今年度のテーマは「アレルギー」。
	Sunflower	カンボジアへの物資支援	神奈川県立伊勢原高校と連携して、カンボジアの小学校「サムバットスクール」に上履きや運動靴、メッセージカードなどを贈った。
	阿蘇は箱舟プロジェクト	除草活動	阿蘇地域の希少動植物を保全すること目的とした除草活動。

2020年度チャレンジセンター長賞受賞者

No.	校舎	プロジェクト名	氏名	リーダー年度
1	湘南	病院ボランティアプロジェクト	大野 遥	2018・2019年度
2		スポーツ社会貢献プロジェクト	山城洸陽	2019年度
3		キャンバスストリートプロジェクト	紅谷綾音	2018・2019年度
4		ライトパワープロジェクト	露木悠葵	2019年度
5		東海大学学生ロケットプロジェクト	堀井滉大	2020年度
6		3.11生活復興支援プロジェクト	須藤和基	2018年度
7		DAN DAN DANCE & SPORTSプロジェクト	多田菜奈美	2019年度
8		Beijo Me Liga	山中大輝	2018・2019年度
9	高輪	Takanawa共育プロジェクト	小坪聖明	2019年度
10	熊本	先端技術コミュニティACOT	野島明博	2019年度
11		阿蘇援農コミュニティープロジェクト	堀江美貴	2018年度
12		あにまるれすきゅープロジェクト	小川紘司	2019年度
13		メカトロマイスターープロジェクト	山口大貴	2019年度

*認定条件

- 1.チャレンジプロジェクトに加入して2年以上活動した者（継続していなくても構わない）
- 2.プロジェクトリーダーを務めた経験がある者
- 3.修了認定を2回以上受けている者
- 4.卒業が決定している者



► チャレンジセンター長賞受賞者の様子・集合写真

プロジェクト年表(チャレンジプロジェクトの歴史)

	キャンパス	プロジェクト	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020
1	湘南	キャンパスストリートプロジェクト(C.A.P.)							キャンパスストリートプロジェクト(C.A.P.)								
2	湘南/伊勢原	病院ボランティアプロジェクト							病院ボランティアプロジェクト								
3	湘南	スポーツ社会貢献プロジェクト							スポーツ社会貢献プロジェクト								
4	湘南	ライトパワーープロジェクト							ライトパワーープロジェクト								
5	湘南	Tokai Formula Club							Tokai Formula Club								
6	湘南	東海大学学生ロケットプロジェクト							東海大学学生ロケットプロジェクト								
7	湘南	Music Art Project (MAP)							Music Art Project (MAP)								
8	湘南	Tokai International Communication Club(TICC)							Tokai International Communication Club(TICC)								
9	湘南	東海大学メディアコミュニティー	東海大学メディアコミュニティー														
10	湘南	Green Communications		Green Communication													
11	湘南	障がい学生支援プロジェクト		障がい学生支援プロジェクト													
12	湘南	Same Same But TOKAI			Same Same But TOKAI												
13	湘南/旭川/沼津	TOKAI DESIGNH PROJECT			TOKAI DESIGNH PROJECT												
14	湘南	環境キャラバン隊*1							環境キャラバン隊								
15	湘南/伊勢原	障がい者自立支援プロジェクト			障がい者自立支援プロジェクト												
16	湘南/代々木	ビーチライフ創生プロジェクト			ビーチライフ創生プロジェクト												
17	湘南	高齢者いきいきプロジェクト			高齢者いきいきプロジェクト												
18	湘南	3.11生活復興支援プロジェクト*2									3.11生活復興支援プロジェクト						
19	湘南	サイエンスコミュニケーション									サイエンスコミュニケーター						
20	湘南	Beijo Me Liga									Beijo Me Liga						
21	湘南	DAN DAN DANCE & SPORTS プロジェクト										DAN DAN DANCE & SPORTS プロジェクト					
22	湘南	Japan Community Development Association(JCDA)									JCDA						
23	湘南	熊本復興支援プロジェクト*2										熊本復興支援プロジェクト					
24	湘南	Tokai Dream Space Team												Tokai Dream Space Team			
25	高輪	Takanawa共育プロジェクト										Takanawa共育プロジェクト					
26	伊勢原	Challenge for the Borderless World(CBW)											CBW				
27	沼津	人と人をつなぐまち沼津		人と人をつなぐまち沼津													
28	清水	東海人力レースポートプロジェクト			東海人力レースポートプロジェクト												
29	清水	三保活性化プロジェクト						三保活性化プロジェクト									
30	熊本	先端技術コミュニティACOT									先端技術コミュニティACOT						
31	熊本	LINK THE LOCAL			LINK THE LOCAL												
32	熊本	肥後のたまもの(農作物仲介サイト運営)			肥後のたまもの(農作物仲介サイト運営)												
33	熊本	Design and Create							Design and Create								
34	熊本	メカトロマイスター										メカトロマイスター					
35	熊本	熊本地域プロデュースプロジェクト									熊本地域プロデュースプロジェクト						
36	熊本	Action Marketing プロジェクト(AMプロジェクト)										AMプロジェクト					
37	阿蘇/熊本	阿蘇援農コミュニティープロジェクト									阿蘇援農コミュニティープロジェクト						
38	熊本	肥後菊伝統継承プロジェクト			肥後菊伝統継承プロジェクト												
39	阿蘇	阿蘇エコ推進プロジェクト				阿蘇エコ推進プロジェクト											
40	阿蘇/熊本	あにまるれすきゅーープロジェクト									あにまるれすきゅーープロジェクト						
41	湘南/阿蘇/熊本	阿蘇は箱舟プロジェクト										阿蘇は箱舟プロジェクト					
42	札幌	札幌ボランティアプロジェクト									札幌ボランティアプロジェクト						
43	旭川	木工製作で行う社会貢献プロジェクト			木工製作で行う社会貢献プロジェクト												

*1 2006年度～2007年度は「日本横断キャラバン隊(北ルート)」、2008年度は「日本横断キャラバン隊(北ルート)」および「日本横断キャラバン隊(南ルート)」として活動した。

*2 特別プロジェクトとして発足し、翌年度より学生応募のプロジェクトとして採択された。

[特別プロジェクトとは]

年度途中からプロジェクトを開始しなくてはならない等の特別な理由があるときに、本センターが設置する委員会の承認により設立されるプロジェクト。

人数条件はなく、特別プロジェクトとしての活動期間は1年以内を条件で、次年度には必ずチャレンジプロジェクトへ応募することとする。



東海大学チャレンジセンター

※2021年度よりスクーディアチーブメントセンターに名称変更しました。

〒259-1292 神奈川県平塚市北金目 4-1-1

TEL : 0463-50-2504 (直)

MAIL : challenge@tsc.u-tokai.ac.jp

URL : <http://www.u-tokai.ac.jp/challenge/>

